

子供の心身の健康問題を考える学会誌

# 育療

27

2003.3

## 特集

—第7回研修会 講演—その(2)

### 記念講演②

『子どものいのちを支援する』……………近藤 卓……………1  
—いのちを学ぶ・いのちを教える—

### 教育講演①

『不登校の子どもの成長・発達』……………大嶋 正浩……………17

### <特別寄稿>

○小児がん「より良い闘病・より良い支援」……………石本 浩市……………36

○事故によって突然わが子を失った母親の思い……………井上 玲子……………42

### [研究実践報告]

・「心身症等不登校経験のある児童生徒の自立へ向けた  
支援の在り方」……………渡辺 洋一……………46

### [実践報告]

・中学部総合的な学習 「ハロー！達人」「プチ弟子入り」  
……………渡邊 直子・鉄井 恵・山下 英……………52

・日本育療学会会則……………60

日本育療学会

《参考資料》

◆学術集会・研修会での「特別・記念・教育講演」等の（主な）題名と掲載号数

- ・『優しさを科学する』-----小林 登（国立小児病院院長） 2号
- ・『学校に行けない子供の現状と課題』-----猪股 丈二（東海大学医学部教授） 5号
- ・『心身に障害があって学校に行けない子供の具体的な要因と対応』  
-----吉住 昭（新潟県立吉田病院 名誉院長） 6号
- ・『学校に行けない子供を持つ親の体験』----須永 和宏（水戸家庭裁判所 主任調査官） 6号
- ・新『福子の伝承』を求めて-----波平 恵美子（九州芸術工科大学 教授） 11号
- ・『小児気管支喘息の治療の現状と問題点』---西間 三馨（国立療養所南福岡病院院長） 11号
- ・『小児がんの子供たちのQ. O. L.』-----細谷 亮太（聖路加国際病院 小児科部長） 12号
- ・『小児がんの子どもの相談で思うこと』----西田 知佳子（聖路加国際病院医療社会事業科長）12号
- ・『アトピー性皮膚炎の治療の現状と問題点』-山本 昇壮（広島大学医学部皮膚科学講座教授）12号
- ・『個性化』した患者指導の必要性（喘息）---栗原 和幸（神奈川・こども医療センター アレルギー科学） 12号
- ・『免疫と長生き』-----奥村 康（順天堂大学医学部免疫学 教授） 14号
- ・『小児腎臓病児の自己管理を困難にする要因』---春木 繁（松江青葉クリニック 院長） 14号
- ・『自閉症の研究の動向』-----山崎 晃資（東海大学医学部精神科学教室教授）15号
- ・『自閉症の治療と養護』-----杉山 登志郎（静岡大学教育学部 教授） 15号
- ・『子どもの心のゆがみと心理療法』-----大原 健士郎（愛知淑徳大学 教授） 17号
- ・『思春期の子どもの心理と不登校』-----管 佐和子（京都大学医療技術短期大学 教授）17号
- ・『難治性てんかんをもつ子どものケア』-----杉山 健郎（関西医科大学小児科 助教授） 17号
- ・『不登校の具体的な要因と対応』-----門 眞一郎（京都市児童福祉センター総合療育所長）18号
- ・『思春期の心の健康と不登校』-----山下 俊幸（京都市こころの健康増進センター所長）18号
- ・『不登校の親と子の援助』-----佐藤 純（京都・精神保健福祉総合センター相談員）18号
- ・『最近の新生児医療』（重度心身障害）----亀山 順治（倉敷中央病院小児科部長） 19号
- ・『重度心身障害児の医療』-----奥野 武彦（滋賀県立小児保健医療センター長）19号
- ・『重症心身障害児の通園医療』-----土屋 浩伸（京都・洛西愛育園園長） 19号
- ・『子どもの心身の健やかな成長のために』---吉竹 香代子（千葉大学名誉教授） 21号
- ・『子どもの虐待とその周辺』-----松井 一郎（厚生科学研究：虐待予防研究班主任）21号
- ・『被虐待児の保護と法律』-----影山 秀人（横浜みらい法律事務所 弁護士） 21号
- ・『小児の生活習慣病』-----岡田 知雄（日本大学医学部小児科 講師） 22号
- ・『精神科医から見た虐待へのアプローチ』---管野 美紀  
(横浜市立大学市民総合医療センター 小児精神科医) 22号
- ・『児童虐待に対する指導相談室の対応』----桒渡 サチコ  
(神奈川県立こども医療センター指導相談室 ソーシャルワーカー) 22号
- ・『虐待を受けている子ども達とその家族への関わりと機関連携』----山田 和恵  
(横浜市教育総合相談センター 港南区学校カウンセラー) 22号
- ・『児童養護施設における被虐待児の生活と心身の成長』-稲本 誠一（日本水上学園園長） 22号
- ・『優しさを科学する』-----小林 登（東京大学名誉教授・国立小児病院名誉院長） 26号

《記念講演》

## 子どものいのちを支援する

東海大学文学部心理社会学科

教授 近藤 卓

ご紹介いただきました近藤でございます。私の専門はカウンセリング、特に、思春期・青年期—中学生や高校生くらいの若い人たちのカウンセリングを、もう20年と少しやっております。私が始めたころは、スクールカウンセリングとかカウンセラーという言葉もまだあまり一般的ではなくて、受け入れられ方が良くなかったのですけれど、最近になって風が私の方に向かって吹いて来ているような思いで暮らしています。

今日お話ししたいと思っておりますのは、タイトルにもありますように「いのち」をキーワードにしまして、いのちの教育ということについてであります。

今回「子どものいのちを支援する」というテーマを頂きまして、サブタイトルとして、私が「いのちを学ぶ・いのちを教える」とさせて頂きました。今日は「いのち」という言葉をキーワードにお話しして皆様と一緒に考えて行きたいと思っております。

### ＜10、11、12歳という年齢の意味＞

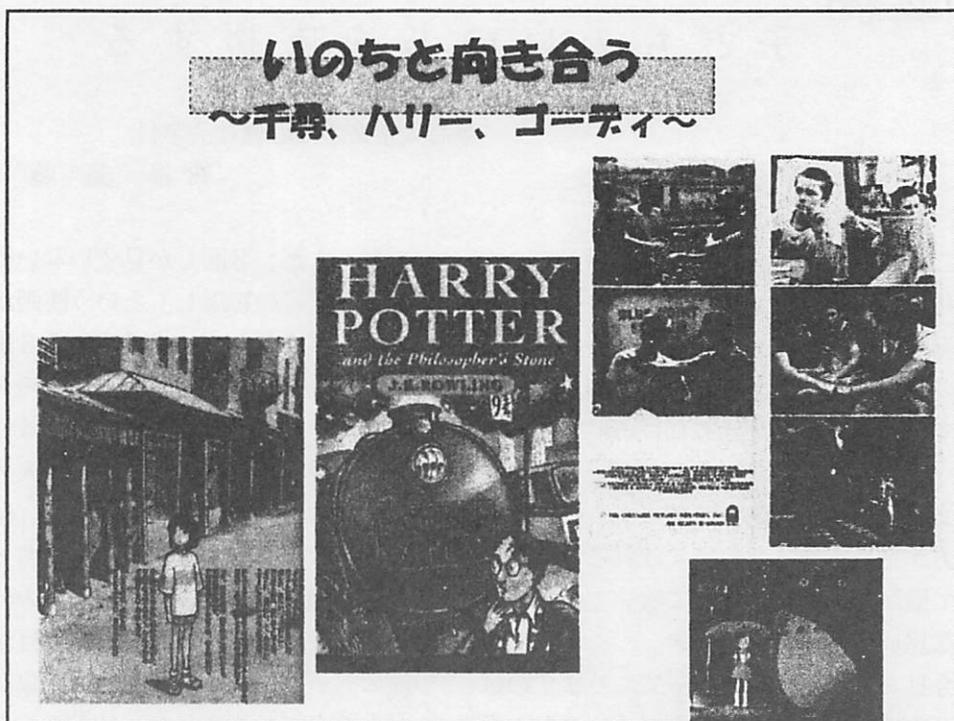
最初に見ていただきたいのは、この“おにぎり”です。ご存じの方も多いと思いますが、映画のDVDにおまけで付いてきた“おにぎりフィギュア”です。フィギュアとは形ということですが、最近、人形とか模型と言う意味で使われているようです。このおにぎりのフィギュアの説明文に「生きる」ということ、あるいは「いのち」そのものであるということが書いてあるコピーを見つけまして、今日のテーマから考えて、先ず見て頂きたい物体だと思って持ってきたのです。

私もまだ、3回しか見ていないのですが、「千と千尋の神隠し」という映画が昨年大評判になりました。一つの映画を3度くらい見たのではまだまだで、映画好きの人たちに言わせると10回も20回も見なければいけないようですが、その映画の中で、主人公の少女がこのおにぎりを食べるのですね。涙を一杯に溢れさせながら食べるシーンがあって、うちの娘に聞いても一番心に残ったのは、このおにぎりをかぶりついて主人公の目から流れる涙のシーンが忘れられない、印象に残る場面だと言っておりました。私もそんな気がするんですね。これが正に、生きているということを実感するその瞬間を象徴的に表しているわけです。極めてシンプルに出来た塩のおにぎりです。

今日、そんなことをお話ししたのはなぜかと言いますと、その映画の主人公が10歳なのです。作者の宮崎さんがカタログに書かれているメッセージを見てみますと、こんなことが書いてあります。10歳の少女というのは、まだまだ幼いところから抜け切れていなくて、自信がなくて、か弱い存在の少女です。それでも何かが出来るということ、少女たち自身に伝えたくて、この映画を作ったということなのです。そこにも今日は着眼してみたいと思っています。10歳というところに、お話ししたいことのキーが一つあります。

〔図1〕は、一番左が10歳の少女(千尋)です。そして私の好きなものを並べてみたのですが、真ん中のものが、(もうすぐ第4巻

[図1]



が発売になる予定ですが) イギリスの作家ローリングの“ハリーポッター”という作品のシリーズから、4年前に発売された 第1巻 “ハリーポッターと賢者の石” ですが、“ハリーポッター”のハリーが11歳なんです。

その右が、小説“スタンド・バイ・ミー”から取った写真(スティーブン・キングの代表作の一つの映画化したもの)ですが、これは12歳の少年達なんです。ついでに、下の方に“トトロ”の場面をカタログから借りてのせましたが、このサツキちゃんと言う少女が12歳なんです。

### <生と死の光と影>

これらはとてもポピュラーな、世間的にもよく知られているものですが、大事なことは今も申し上げましたように、10歳、11歳、12歳という年齢だということなんです。もう一つ大切なことというと、全てこれらの物語が、いのち—“生”とかあるいは“死”と言っていいかも知れませんが、場合によ

ては病気ということにも広げて行けば、この3つ、或いはトトロまで入れれば4つの物語りは、全て“いのち”に関わる問題がテーマ、ものすごく重要なテーマになっているということなんです。

最も端的なのは“スタンド・バイ・ミー”という小説ですけれど、まだお読みになっていらっしゃる方は、ぜひ原作をお読み頂きたいと思います。或いは時間のない方は、ビデオで映画をご覧になってもいいかと思

ここに4人の少年がいますが、彼らが一泊二日の旅行をするんですね。シュラフを持ってキャンプ旅行をする。有り合わせの小銭と食料を持って。その時、ピストルまで持ち出して(何を守るためか、何のためにいのちを懸けて)一泊二日の旅に出掛ける。何のために、これはいのちの旅なんですか、具体的に言えば、死体を見に行くんですね。少年の死体……彼らと同じ12歳の少年の死体……電車で轢かれた轢死体ですね。死体が見つ

ったという噂話を聞いて、4人で力を合わせて命懸けで死体を見つけに行く、第一発見者になるんだという誓いを立てて旅行に出掛けるわけです。ただの仲良しが冒険旅行に出掛けたという話ではないんですね。一番重要なことは死体を見に行くという、死体を見た途端に彼ら4人の心の中に大変な変化が生まれるんです。象徴的に言えば、その瞬間に彼らは大人になっていくということなんです。自分たちと同世代の子どもの死体を見た、その瞬間に大人になっていくという、正に「いのち」—今日のテーマにぴったりの映画で、私の話をするよりも、ここで“スタンド・バイ・ミー”の映画を鑑賞して終わりという方が良いのではないかと思います。そのくらい良くてきたお話です。映画だと思えます。大学生にも聞いてみますと、その小説や映画は知っているんですが、何が描かれていたのかと聞くと、意外に忘れていたり、気が付いていなかったりするのですが、実はそういう内容なのですね。

“ハリポッター”と言うのは、今は大変なブームになっていますから、お読みになった方もいらっしゃると思うのですが、その物語の背景にあるのは“いのち”であったり、“死”であったり幽霊であったり、つまり死の影がただよっているものが辺り一面にある。

“千と千尋”も、主題歌にあります [図2] したけれど、生きること、死ぬこと、それを考える。ついでに言えばトトロの話も、子どもがとても愛しているお母さんが何時死ぬかも知れないという状況が横糸になっているお話だと思えます。トトロのあのおかしな、可愛げな柔らかい雰囲気、トトロというお化けの存在がクローズアップされていますが底に流れているのは、12歳の少女が自分の愛する母親が死ぬか生きるかと言う状態

にある時に、揺れ動く心や成長を描いている。そう思いますと、まさに“いのち”と向き合うという意味で、これらのお話や映画が、今の世の中でこれ程に注目を集める原因があるのではないかと思います。ただ単に、面白おかしいとか愉快だとか楽しいとか可愛い（それも重要な要素だとは思いますが）だけでなく、その底に流れているとても深い“いのち”に、10歳11歳12歳という年代の子ども達が向き合っつつかって大人になっていく、或いは成長していくと言う物語り、それが共感を呼んでいるのではないかと思います。

### ＜「いのち」の意味＞

次に [図2]、ここでも“いのち”と書きましたが、敢えて平仮名で“いのち”と書いてあることの意味を整理しておきたいと思えます。

「いのちの意味」、いのちといえば、まず漢字の“命”が出てくると思うのです。そして、イメージとして漢字の“命”から出てくるのは、やはり身体的な「生と死」ということに結び付く、あるいは結び付いた状態が使われてきたという、歴史という伝統があるのではないかと思います。当然、我々が存在しているのは、身体的に存在しているだ

### 「いのち」の意味

身体的・精神的・社会的  
スピリチュアルな存在としての  
人間の生と死



「いのち」

けではなくて、よく出てきますWHOの健康の定義にあります表現、あれでも十分ではないと思うんですが、もっともっと多面的な存在として我々は在る。そうすると、漢字で書く「命」だと、どうしても身体的という束縛から逃れられない、逃れにくいのではないかと、我々は「いのち」と使うようにしております。ただ平仮名だと柔らかい感じがするとか、何となく今風だとかと言う意味で、平仮名にしているわけではありません。先程のWHOの定義は、身体的、精神的、社会的に良い状態というように言いますが、それに数年来スピリチュアルと言うようなことも議論されていましたが、少なくともこの4つの側面は、言葉としても頭に思い描かなければいけないものだと思うのです。そういう人間の生と死—身体的にも生きたり死んだりするけれども、精神的にも死んだり生きたりする、或いは社会的に生きている、社会的に死んでいる状態も当然考えられると思いますし、精神的心理的に良い状態だとしても、スピリチュアル（ここではあまり深入りしませんが）—人間の魂と言いますか、訳すと“霊的”と言ったり“魂的”と言ったり議論がありますが、とにかく多面的な存在としての人間の「生と死」を考えるならば、平仮名で表現して見ようと思ったわけです。〔表1〕

### <いのちの体験>

少し話を進めまして、データ的なものをお示したいと思います。

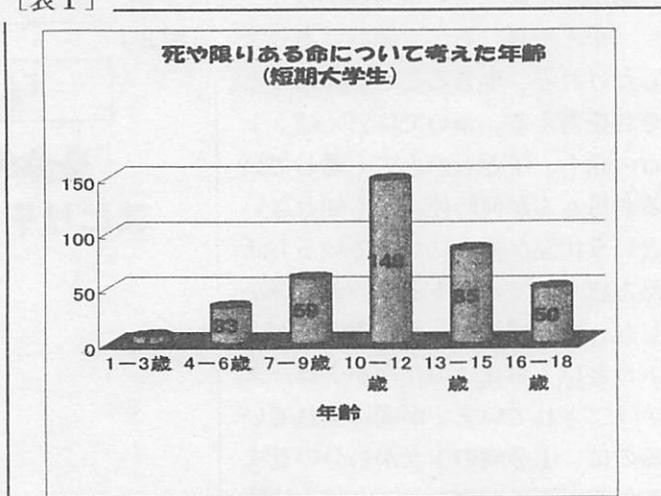
先程のお話の中で10歳、11歳、12歳を取り上げましたが、それが何故意味があるのか。実は大変な意味があるのですね。

右の〔表1〕ですが、3年ほど前、469名の短期大学生を対象に「死」あるいは、「いのちに限りがある」ということについて考えたことがあ

るかどうかの「振り返り調査」をして見ました。（曾我、近藤他：「いのちに関する短大生の意識」『学校メンタルヘルス』VOL. 4, 2001年11月）

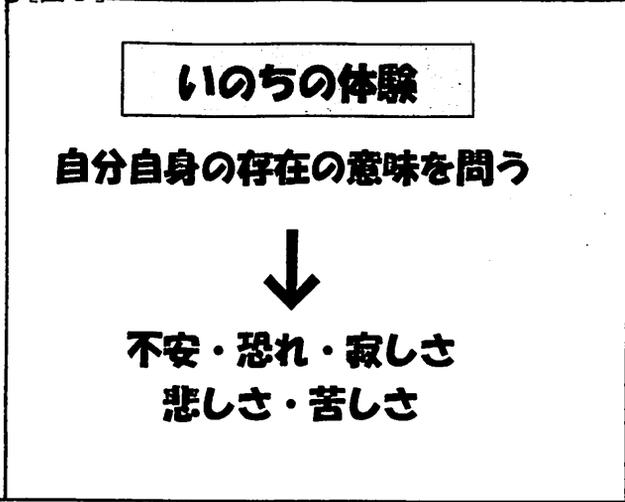
「死について考えた」或いは「いのちに限りがある」ということに、何かのきっかけで思い至ったという経験がありましたか、と言う質問に、かなりの率（80%以上）で大学生「そういうことがあった」と答えたのですが、その時期が10歳から12歳にきれいに出ているんです。当然のように、それからちょっと遅かった人も、ちょっと早かった人もいますが、圧倒的多数は10歳から12歳、まさに「千尋」から「ハリーポッター」を経て「ゴードニー」まで、この年代の子どもたちの時に「死」ということを考えたというんですね。似たような調査を何回かしているのですが、みんな同じような結果になっています。

こんな話をしているうちに、皆さんも「自分はどうだったか」と考えられる方も多いと思います。私自身も、小学校5年生の時に、そんな経験をした覚えがあるんです。私の場合は非常に単純なことで、小学校5年の理科の授業の時で、この会場のような階段風の教室だったと思うんですが、明かりを落として、



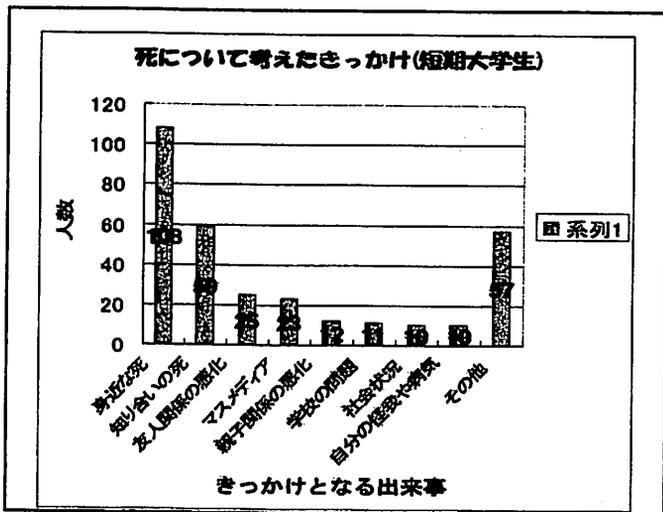
先生が教卓のところで宇宙の話をしていて、100ワットの電球が太陽で、腕木の先に付いたピンポン球が地球だ、そして自転と公転の話をする。その話を家に帰って、夜寝る時に布団の中で寝付く前にふと思い出しました。すごい遠大な話、それに比べて自分の存在は何て小さいのだろうか、宇宙はずっと続いて行くのに僕はまだ十何歳、僕がいなくなっても地球は、宇宙は動き続けるみたいなことを考えているうちに、部屋の四隅がすーっと遠のいていって、瞬間的に部屋が大宇宙空間になって、布団に乗った

[図3]



[表2] 近藤卓少年が宇宙をさまよっているような気持ちになりました。

その時、怖くて怖くてたまらなくなって、これ以上考えたら怖いことになると思って考えることを止めたということが、私の最初の考えることをストップした体験ですが、それをここでは「いのちの体験」[図3]と呼びたいと思っています。自分自身の存在の意味を問う、今の話はそこまで深くはないのですが、何か宇宙の大きな営みに比べると、自分の存在は何だだろう、どんな意味があって生まれ



てきたんだらう、自分が死んでしまった後はどうなるんだらう、そんなことを考えて自分自身の意味ってどんなものなんだらうと、ちらっと考えてやめてしまったのですね。その時に、怖かったり不安だったり寂しかったり、えもいわれぬ寂しさや怖さの体験があったことをお話しすると、多くの方が自分もそんなことがあったと頷かれるのではないかと思います。

それが、先程の大学生の振り返り調査ですね。10歳から12歳。勿論、大変早熟な方も居られて、1歳から3歳までに感じたという

人もいますが、ちょっと眉ツバという気がしないでもありませんが、ひょっとしたらあるかも知れませんね。

<共有>の意味

その時のきっかけということと同じ調査で聞いておまして(表2参照)、身近な死、知り合いの死、友人関係の悪化、マスメディアの話、親子関係の悪化、学校の問題、社会状況の影響、自分のケガや病気、その他ということで、やはり身近な死、特におじいちゃんやおばあちゃんの死(ちょうどそういうこ

とに巡り合う年齢なのかも知れませんが、きっかけで死を考えたというケースが多いようです。身近な人の死というのは分かりやすいのですが、友人関係の悪化とかメディアの影響ということも、無視できない数があります。場合によっては親子関係が悪いとか、学校の問題で、テストの成績が悪かったとか、先生に叱られたとか、クラスでうまく行かないことがあったとか、学校にかかわる一教育に関わることもきっかけになって、自分は何なんだろうと考えると言うんですね。

その時の感情としては、多くは怖いとか悲しいとか、寂しい、嫌だ、苦しい、不安、空しい、その他、種々雑多な感情が浮かんできたということです。10歳から12歳くらいの少女は「いのちに限りがある」とか「死が存在する」ということを、現実的に感じたときに、とても怖い或いは悲しい、寂しい、そんな感情を持っているということは、押さえておかなければいけないと思いました。ひょっとしたら、我々が忘れてしまっていることかもしれないと思うんです。私は、このようなお話をするようになったからかも知れませんが、小学校5年のときの布団の上での部屋が四隅に遠のいた体験を、しばしば頭に浮かべて、物事は深く考えてはいけない、深く考えることは止めようと思ってきたのですが、

多くの世の中の子ども達が、果たしてそれをどういう風にして乗り越えているんだろうと云うことが、非常に気になっていまして、それを調べたいというのが今の私の研究テーマになっているのです。

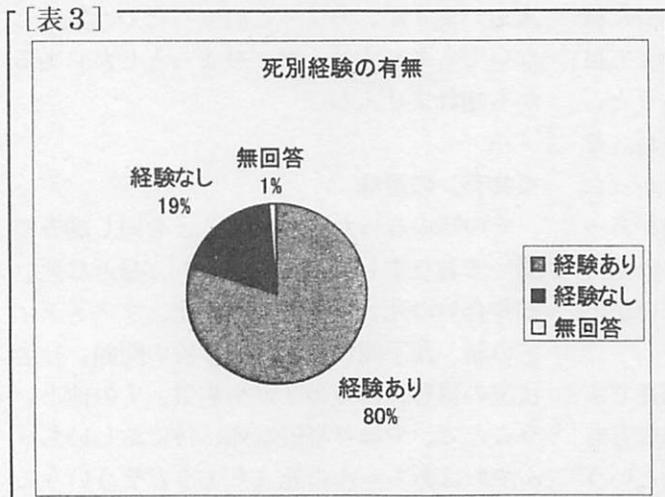
数年前に、「子どもといのちの教育研究会」というのを我々が始めたのですが、その発端は何かと言いますと、一つははじめがあったり、いじめられて死んでしまうと言うようなことがありましたね。あるいは暴力を振るう、見ず知らずの人にも暴力をふるうなどということが、青少年の問題としてクローズアップされてきて、なぜこんなに「いのち」を軽く考えるのだろう、とすることがありました。それは、ひょっとしたら社会が変わって「核家族化」して、身近なところでおじいちゃんやおばあちゃん、又は犬や猫でも良いのですが、つまり身近なところで生と死に遭遇しない、体験できていないので、いのちの重さを考えることが身につけていないのではないかと考えました。

そんなことで、早速調べて見ようということで、東京近辺の中学生を中心に（その頃、中学生のいじめや自殺等ということが多く報じられました）聞いて見ることにしました。中学生たちが、きっと身近に「死」の体験をしていないに違いない、だからこんな結果にな

っているのだという仮説を立てたのです。そこで、卒論のゼミの学生と一緒にアンケート調査をしました。東京、神奈川、千葉の約300人くらいの中学生に調査をした結果が左の「表3」です。

死別経験、身近な死別経験があるかないか—ここではペット（家で飼っていた犬や猫など動物）も入れました。すると、死別経験が約80%あるんですね。先程の大学生の調査と同じで（80%）、身近な死別経験

「表3」



がないわけではないのです。大多数の中学生は死別体験をしているのです。経験をしていない19%の中学生がいました。この少年少女たちが“いのち”についての思いが不十分なのではないか、というのが我々の最初の仮説でした。この80%の中学生と19%の中学生では、“死”とか“いのち”についての思いが違うのではないか、この80%の死別体験をしている子ども達は“いのち”を深く、重く受け止められるけれども、19%の経験のない子ども達は危ない子ども達であろうという仮説です。で、調べて見たのです。

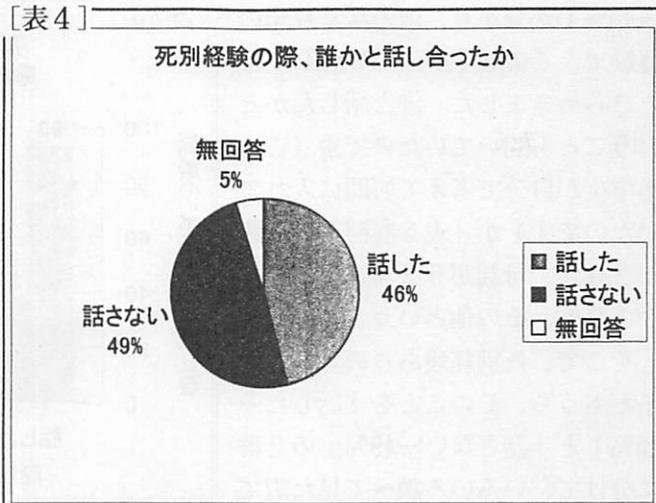
ところが、いわゆる統計的に見て、有意な差がなかったのです。全く有意の差がありませんで、こういう仮説の下に、学生は卒論を纏めるはずだったのに、「先生、有意差がありません。どうしましょう。」とコンピュータ室から泣きながら出てきました。仮説が崩れたわけです。では仮説が崩れたという結論にしようじゃないか、などと無責任なことを言ったのですが、学生は納得しません。これを証明しようと思ったのに、出来ないでは耐えられないことだったのです。そこで、いろいろ調査結果をこまかく見ていくことにしました。

そうしましたら、彼が何かを思っていたのでしょー「死別体験をしたときに、そのことについて誰かと話し合いましたか。はい。いいえ。」という、『話し合いをしたかどうか』という質問をしていたのです。

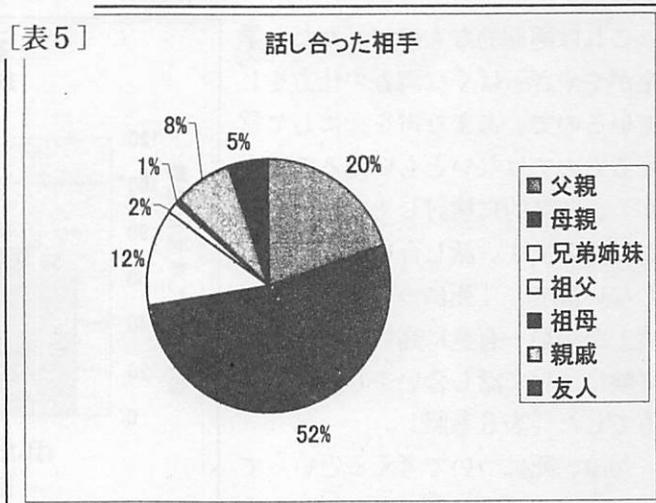
その結果を見てみましたら[表4]、

「話した」が46%、「話さない」が49%と大体半々でした。話した内容はよく分からな

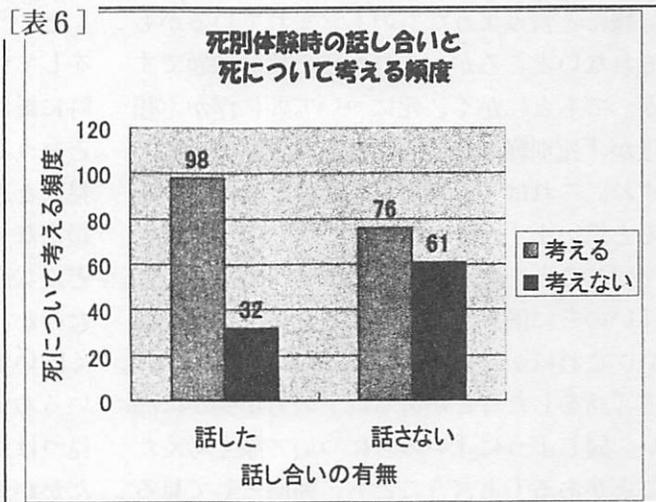
[表4]



[表5]



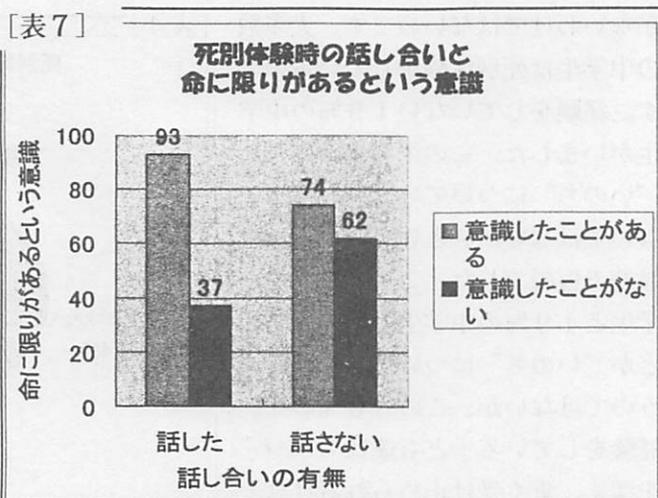
[表6]



いのですが、とにかく死別体験をした時に、そのことについて「話した-46%、話さない

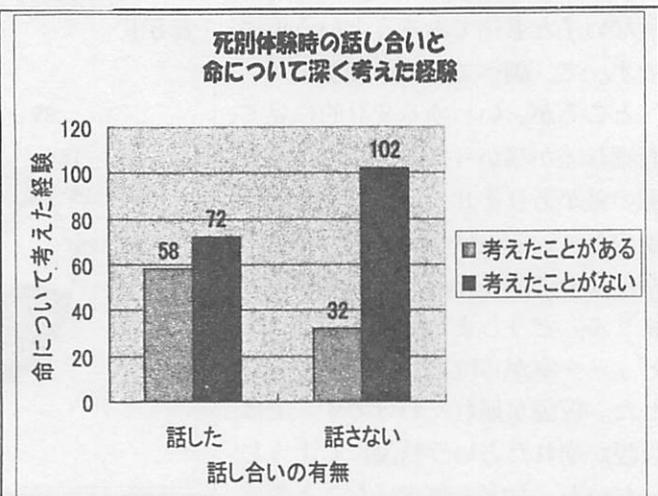
「-49%」が分かり、何となく長年の経験で、この数字が「いい感じ」だとひらめきました。誰と話したかと言うことも聞いていたのです（これも学生が自分で考えて質問に入っていたのです）が〔表5参照〕、父親が20%、母親が52%、兄弟姉妹が12%、その他ということでした。そこで、死別経験ありの80%の子どもうち、そのことを「話した-46%」と「話さない-49%」の2群に分けて、いろいろ調べて見た訳です。

〔表7〕



〔表8〕

これは画期的なもので（ただ、学生がややざっぱく調査の仕方をしているので、あまり声を大にして言えるものではないともいえるのですが）、統計的に検討しますと有意差がでるのです。話し合いをした群としない群で、「死について考える頻度」が高い-有意に高いのは「死別経験について話し合いをした群」の方でした〔表6参照〕。



勿論、死について考えるといっても、死んでしまいたいとか、この世は嫌だと言うようなものも含まれているかも知れないところが、これからの検討課題ですが。でもとにかく、死について頭に浮かぶ頻度が「死別経験を話した群」の方が高いのですね。これはグラフで見ていただいても分かると思います。

同じことを幾つかの項目でやって見ました。「いのちに限りがあるという意識」が高い低い、これはかなり明確だと思います〔表7〕。

「話をしたことがある群」の方が明かに高い。同じように「いのちについて深く考えたことがある」と言うことも、傾向として見ると「話し合ったことがある群」の方が高いということが出来ます〔表8参照〕。

ということで、ポイントとしては死別経験をしているかいないかではなくて、死別経験時に誰かとそのことを話したかどうかだということ。これは、かなり画期的な発見だと思っていて、このことをもう少し緻密なデータで、或いは数を集めて、更に、どんな意識なのかとか、どんな話し合いだったのか、或いは死別経験前後の状況等を細かく聞いていく形で、明らかにしたいと思っ

ているんですが、方向性としては確かな脈を見つけたと考えています。そのうちに、どなたかがその脈を掘り進んで行かれるかもしれないので、自分で掘らないでも宝物が出てくるかも知れません。

死別経験があるかないかということ、身近な死を体験しているかどうかはとても大事だという風に、今でも思われている面もあると思うのですが、そうではなくて、死別経験の有る無しにはあまり関係なく、その時に、その思い（悲しいとか恐ろしいとか、辛いとか苦しいとか不安だとか）を、誰かと話し合いを持ったかどうかが大切だと思うのです。それを私は、「共有」と言いたいと思うのですが、共有したかしないかによってその後子ども達の“いのち”あるいは“死”に対する思いが二つに大きく分かれてくる訳です。それをこのデータが示してくれているのだと思います。

「スタンド・バイ・ミー」では、4人の少年たちで共有したのだと思います。最初の「スタンド・バイ・ミー」に戻りますと、ゴードーという少年はお兄ちゃんがいたのですが、その兄さんが最近事故で亡くなったのです。両親がとても楽しみにしていたお兄さんが亡くなったということで、両親が残された次男のことを振り返ってあげられないんですね。ところがその残された少年が12歳で、一番危ないところにいる、そういう大事な時に、身近な大好きだった兄が亡くなった、そのことについて「お父さんお母さん、こっちを振り向いてよ、僕のこの気持ちを受

け止めてよ」という思いでいるのに、お父さんもお母さんもそれぞれが自分の世界に入ってしまった、それぞれが打ちひしがれてしまっている。独りぼっちにされたゴードーという少年。スティーブンキングという人は、すごい作家だと思うんですが、そういう設定をしておいて、轢死した少年の死体を見に行く、仲間4人で見に行く。その4人の内の1人クリス（将来、弁護士になるんです）が、4人の中でも取り分け親友で、同じ年だけれどちょっと頼りになる、頭もよく力も強くて、ケンカも強い少年、彼がゴードーに寄り添ってくれて旅に出掛けると言う設定なのです。それが正に「共有」だったのです。ひょっとすると家族の共有がなくても、こんなふうに友達同士で思いを共有する体験が出来るかもしれないという思いもします。

### <いのちの意識の発達>

もう一つは、いのちの教育、いのちを学ぶということを考える時に、子どもの発達段階に応じた“いのち”の意識とか、死というものについての意識について、広く調べ直してみようということで、一番古典として必ず紹介されるものが、この方のデータ [図9] です。マリア・ナギーというハンガリーの心理学者です。1940年代の調査です。ブタペ

[図4]

### 子どもの命の意識

◆マリア・ナギー(ハンガリー、心理学者)  
(3~10歳の子どもに面接調査)

- ①(4~5歳)すべてのものに生命を認める
- ②(6~7歳)すべて運動するものに生命を認める
- ③(8~11歳)自己の力で運動するものに生命を認める
- ④(12歳以上)動物だけに生命を認める

スト周辺に住んでいる3歳から10歳の子どもの数百人を対象にして、面接調査をしまして、未だに古典として「子どもの死意識」を考えるときに引用される文献だと思えます。翻訳は出ていないようです。要約ではありますが、私が主要な部分を翻訳して著書に引用しております。

(近藤 卓:『いのちを学ぶ・いのちを教える』大修館書店、2002年)その要点だけを纏めると [図4] のようになります。

3歳から10歳の子ども達が、4段階に分かれると言うのです。子供の「いのちの意識」はこういうふう発達していく。これは面接調査で、小さい子は字が書けませんので、図や絵を描いてもらって、その絵についてナギ一たちが話を聞いて調べたデータです。

第1段階が、「すべてのものに生命を認める」、6歳から7歳の子どもは「すべて運動するものに生命を認める」一時計などは動いていますから、カチカチ音がしますから命がある一運動していても転がるボールのようではなく、「自分の力で運動するものに命を認める」というのがその次の段階、最後に、完成された状態と言いますか、「動物だけに命を認める」というように、命の存在が子どもたちの中で段階を追って発達して行くということをおっしゃっています。

これに類した調査は、日本でも沢山の方がやっておりますが、今日は詳しくはご紹介出来ませんが、同じような結果が出ていると報告されています。

ただ、5年生6年生になっても、机などにも命が有るといふ子どももいるということが報告されていますが、それは身近な所で親しんでいる、自分がとても大切にしているものには命があると答える子どももいるようで、すべての子がデータ通りになるという訳ではありません。

いのちの意識には、発達段階がある。発達段階という言葉が出てくると、エリクソンとかピアジェとか、いろいろなもっと広い意味での、いのちと言うことではなくて広い意味での心理的発達、或いは心理社会的発達段階ということ、いろいろな形で理論化しているものがありますので、そういうことも視野に入れて考えて行かなければいけないと思います。私としては、こういった「いのち」の意識がどんな段階で発達していくのか、それを念頭に置きつつ、いのちの教育或いは、い

のちを学ぶ、いのちを教えるということを考える必要があると思います。いきなりそういう意識が整っていない、いわばレディネスが十分でないところへ持ってきて「誰だって死ぬんだ」ということをぶつけるとか、「いのちとはこういうものだ」と言ってしまうのは、子どもに無用な不安感や混乱を起こすことになるのではないかと思います。「いのち」「死」ということについての意識の発達段階を、われわれは押さえた上で、だから小学校の低学年では、こういうことをこんな風に提示すれば良いのではないかと、中学生にはこういう提示が相応しいのではないかとということ、段階的にプログラムしていかなければいけないのだらうと思うのです。

そんな思いで、学習指導要領などを紐解いてみたり、例えば、道徳の指導書や教科の指導書などを見ていきますと、そう的外れにはなっていないと思えました。その辺も、先程紹介しました本に書いてありますので、参考にさせていただければ幸いです。

### <共有と愛>

話を先程の話に戻しつつ進めたいと思いますが、私は「共有」ということが一つのキーワードになると思っております。これは自分がカウンセラーという職業を20年という、私の人生の中では長い時間を過ごしてきた中から出てまいったものです。共有ということはとても重要だと思っております、先程から言っております、例えば「スタンド・バイ・ミー」であったり、死別体験の時に誰かと話をしたかどうかということであったり、共有ということがここで結び付いたという気がしております。私の中では、自分のしてきたカウンセリングという仕事（それは、共有をする、或いは共有の場を提供する仕事だと思っているんですけど）、それと「いのちを学ぶ」とか「いのちを教える」とか、いのち

の体験ということの共有ということは、ここへ来てびったり結び付いたと言う気持ちがございます。私は「共有」というのは非常に重要な言葉だと思います。

私の好きなエーリッヒ・フロムが『愛すること』という本を書いています。彼の言葉で言えば「愛する」という言葉になります。共有を“愛”と言ってもいいと思うのです。ただ、“愛”も“いのち”も、ちょっと似たような状況にあるように思われます。

“いのち”（いのちと言う言葉そのものが、タブーに触れるというのでしょうか、ちょっと臭いとか、実際に私はこういうお話をする度に体験していますので）という言葉は、まだまだ受け入れられにくい言葉、或いは概念又は領域なのだと思っております。「いのちを学ぶ」「いのちを教える」というと、あなたはどこまで死生観ができていますかとか、宗教的背景は何なのかとか、いろいろ追求されたりすると、その度に辛い思いをします。その時感じるのは、世の中ではまだまだ「死」について語ることはなかなか受け入れられにくい状況があるのかということです。

そういう意味で、こういう学会に呼んで頂いて、「いのちを学ぶ」というタイトルで話をさせて頂けるという瞬間から、私は受け入れ

られているという思いを強くしているんです。

そういう訳で、“愛”ということは敢えて使わずに、「共有」と言ってみようと思ったのです。共有という言葉でその辺を統合して一私が出来てきた仕事が統合されかかっているなと思い、纏めて見たいと考えているわけです。

私は大学を出て最初についた仕事は、高校の教師で、そこで10年くらい勤めました。学級担任や部活で高校生と追いかけてこした、高校の教員の仕事も忘れ難いことです。それから大学院に入り直して、心理学の勉強をして、カウンセラーの仕事をして20年。そして、ここ5年ほど“いのち”のことを考え始めたのです。私のしてきたいくつかのことが、何か近づいてきて、合わさって来ているところに、「共有」という言葉があるような気がしてなりません。その共有ということは、先程から幾つかの証拠（状況証拠みたいなものですが）が集まりつつあるなと思っておりまして、「共有」ということが、一つの重要なキーワードになると考えています。

その「共有」というのは、何を共有しているのかと言いますと、こういうことではないかと思うんですね [図5]。

『答えの出ない問い』に気づき、それについて考え感情を共有する。これはもっとすっきり纏める、或いは言い尽くせていない部分があるかも知れないのですが、今の段階で表現して見るとこんな感じかと思っています。カウンセリングでもそうですが、答えの出ないような問を、クライアントである中学生、高校生或いはそのお父さんやお母さんと一緒にああだこうだを考える。汗を流したり涙を流したりしていることが、結局、私自身のやっているスクールカウンセ

[図5]

## 「共有」と「棚上げ」

◆**答えの出ない問いに気づき、考え、感情を共有する。**

◆**答えに到達していないまま、問いを棚上げにする。**

リングの仕事かなと思っています。ここでもう一步踏み込んでソーシャルワーク、ケースワーク的なアプローチをして、答えがしっかり出るようなところまで寄り添って行くとか、援助するとかということまで、なかなかやれない、或いは、やらないでやってきたというのが、この20年間の私のカウンセリングのアプローチで、結局、答えが出ないのです。

### ＜棚上げの大切さ＞

自画自賛するようで面はゆいのですけれど、それでも救われたとか、会えて良かったと言ってくれるクライアントの人達が、これまで何十人もいてくれたのは何なんだろうと思うのです。やはり、不安とか葛藤とか苦しさとか悲しさを一人で感じていたのを、私がカウンセラーとして共有する、一緒に感じるというところで、彼らが救われたとか（一瞬の救いかも知れませんが）という思いを語ってくれるのではないかと思います。それと「共有」ということとがセットになっていると私は思うのですが、結局、答えが出ないのですね。でもどういう訳か、考える、思う、感じる、苦しいとか悲しいとか言うことを、二人で語り合ったら、何となく気持ちが少しその瞬間楽になって、取り敢えずその問を棚上げにして生きていける。生まれてきたことに自信がもてない（この事は、今の中学生などの一つの重要な共通項ではないかと思っていますが）、自分に自信がもてない、自己肯定感が持てないとか、自尊感情が持てない、自分の存在が取るに足らないもののように思う、場合によっては自分の存在の先が見えているということは、カウンセラーのところに来ってくる子ども達に共通しているように感じているのです。

そういった、自尊感情が持てない、自信が持てない、それは具体的に「何のために生まれてきたのか」「生きている価値があるのか」

など、いろいろなことを語るんですけども、そのことについて不安を語ったり、悲しさや葛藤を語ったりして、それを共有した後で、何となく楽になって、取り敢えずそれを棚上げにして「まあ、いいや」と言うふうな感じの、一瞬深刻で生きるか死ぬかという、自分の存在が消えてなくなるかも知れないというような深刻な、実存的な問いかけであり、人間の根本に触れる不安であり葛藤であるんだけど、でも答えが出ないんだから「まあ、いいや」ということで、棚上げにする、と言うことを結局、私たちはやって来ているのではないかと思うんですね。どうでしょう。会場にお集まりの先生方は私より人生経験も多く、思考も深い方が多いと思いますが。

答えはないのではないかと思います。何のために生まれてきたのかとか、人間はなんのために存在しているのかとか、そんなことをきちっと全ての人に納得して貰えるように回答を示せる人がいるのだろうかとは私は思うんです。もちろん一部の人に納得して貰うことは出来る。50%の人に納得しては貰える、しかし半分の人には納得して貰えない。場合によっては99%の人には納得して貰えるけれど、1%の人には出来ないと言うこともあるでしょう。全ての人が納得出来るかという、そうはいかなのではないかと私は思っています。

だとすれば、人間としての根本的な問である「自分は何のために生まれてきたか」「命とは何なのか」という問については結局は、ある程度棚上げにするということを繰り返しながら生きていくのではないかと思います。ところが、大事なのは、子ども達はそうは思わないのです。10歳11歳12歳の子ども達は、そうは思わないのです。これは答えが出るはずだ、答えを掴まなきゃいけない。何とかして答えを掴まなければと思ってしまうのです。その時に、共有体験をした子ども

達、例えば「スタンド・バイ・ミー」の少年たちは、何でそういうことが出来たかという、棚上げに出来たからだと思うんですね。4人の少年で思いを共有して“死とは何か”“いのちとは何か”、人間が死ぬということはどういうことなんだろうということ、目の当たりにして、自分たちなりの回答を得て、まあ、根本的な回答は棚上げにして、とにかく生きて行こう、家へ帰ろうよ、ということで夕暮れの町へ散って行くんですね。それから、新しい人生を進めて行く。

ところが多分、その後、就職だとか、結婚だとか、恋愛、失恋、その度に「自分の存在の意味はあるのだろうか?」「いても居なくてもいいのじゃないか?」などという思いが、棚の上からガラッと落ちてくるのではないかなと思うんです。そして、それをまた、棚上げするのではないのでしょうか。そして次の日、元気になる。小さなことでも落ち込んでしまうことがあります。その度に棚上げして、また生活が始まるのではないのでしょうか。

何故そういうことが出来るのでしょうか。10歳11歳12歳の、最初のいのちの体験の時に、共有体験をして棚上げをする術を、私たちは何処かで身につけたのではないかなと思うのです。誰かに共有してもらって「自分だけではない、皆そうなんだ」というように身につけたのではないかなと思うんです。だからこうやって、50、60、70歳と元気に生きていられる。つまり、60歳70歳まで生きていられるのは、棚上げを繰り返して又、元気になっているんだと思うわけです。

ですから、それが身につけられないまま置かれた少年や少女たちは、独りでその回答を見つけだそうと、あがいて努力するのではないのでしょうか。何とかして「自分には生まれしてきた意味があるはずだ、価値があるはずだ」「意味があるからここに存在しているに違いない」と一生懸命探すんじゃないのでしょうか。

探すというよりは、自分の心の奥深くへ分け入って行って、自分の中へ中へと入って行って、「自分とは何?」「自分の価値とは何?」「そもそもいのちとは何か」「死とは何なんだろう」ということを、独りで考えて追求して行く道に分け入ってしまう。私はそう思うんです。

その悲劇が、いのちの存在を確かめようとする孤独な行為です。数年前の、バスをハイジャックして人を殺してしまった少年とか、豊川市でしたか、主婦を金づちで殴って殴って、何処まで殴れば死ぬんだろうと言って殺してしまった少年とか、或いは14歳の少年が神戸で小学生を殺して切り刻んでしまった事件が思い出されます。こういう少年たちのことを思うと私は、なにか10歳~12歳の頃に、そういう“いのちの体験”をした時に、誰とも共有できなくて独りで、いのちの意味とか人間の意味とか、死ぬってどういうことかと言うようなことを一人で調べよう、一人で考えた最後のところが、そういう所だったのかも知れないと思うのです。そこでなんとかして共有体験をする、出来ればお父さんであったりお母さんであったり、身近な兄弟やおじいさん、おばあさん、或いは友達であったり学校の先生であったり、とにかく誰かと共有体験をして、苦しい悲しい恐ろしいことが共有出来たときに、子どもは救われるのではないかと、問を棚上げできるのではないかなと思っております。

時間が残り少なくなりました。いのちの教育の、年齢による段階について、大雑把に区切りだけを見て頂きますと、3つに分けたらいいかと思っております〔図6, 7, 8〕。

取り敢えずは、小学校の低学年まで、(先の、ナギーの「いのちの意識の発達」などを考えても)低学年までというのは、こんな風なテーマですね。具体的に言いますと、自然

っていいな、家族っていいな、動物っていいなとか、生きている喜びを直接感じられるようなことがテーマになるのではないか。(詳しくは本に書いておきました)。

2番目の段階としては、小学校高学年と中学生くらいのところですよ。もう少し細かく分けた方がいいのかも知れませんが、先程から言っておりますように10歳~中学生の段階というのは、いのちの体験をする一番多いところで、そこでやはり共有を学ぶ、棚上げを学ぶということが大きなテーマになるのではないかとのことですね。

第3段階は高校生とか大学生で、さらにそこから一步進めて、自分の存在意義をきちっと正面から問い直して、自分の生きる道、生きる方向性を明確にして行くという段階が来るのではないか、こんなふうに思っております。

#### <無条件の愛と無条件の禁止>

こういう問がありましたね。数年前にTVで、問が発せられて、それに答えられる大人は誰もいなかったと言う話で、一頃話題になった事がありました。が、「何で人を殺してはいけないのか」。人を殺してはいけないのかという問だけではなく、子どもが発する様々な問-いのちとか死とかのテーマに関わる事だけではなく、いろいろな問が我々にぶつけられて来ると思うのですけれど、それに答える、説明する、説得する、解らせる、それはとても大変なことだと思ふんです。

ただ、私は「何故人を殺してはいけないの

[図6]

### いのちの教育の段階Ⅰ 幼稚園・保育園・小学校低学年

自然、家族、動物、植物などとのふれあいを深め、それを体感すること。

**「自然っていいな。家族っていいな。動物っていいな。」**

[図7]

### いのちの教育の段階Ⅱ 小学校高学年・中学校

不安、恐れ、孤独、悲しさを共有し、「棚上げ」を学ぶこと。

**「ひとりじゃない。私だけじゃない。答えは出ない。」**

[図8]

### いのちの教育の段階Ⅲ 高等学校・大学

自分の存在意義を問い、生きることの意味を求めること。

**「なぜ、なんのために、なにをめざして生きているんだろう。」**

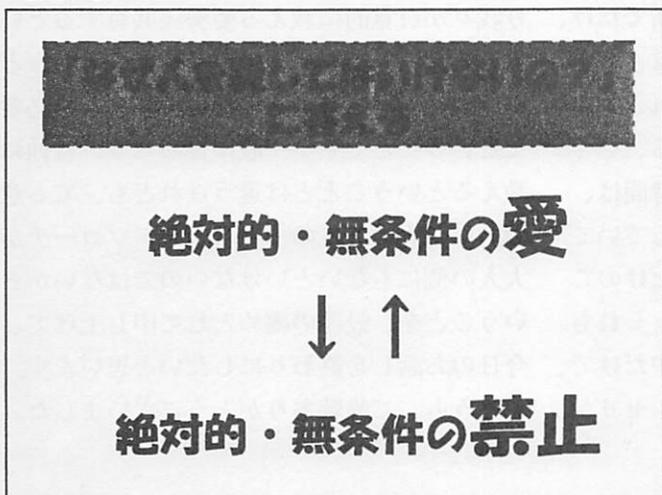
か？」ということについては、説明出来ないと思っております。

結論として私はそう申し上げたいのです。それは、説明する、説得する、解らせるという問題ではなくて、説明抜きに、問答無用に、絶対的に駄目なものは駄目だというのが、私の根本にあります。そうでなければいけないのではないかと思うんですね。人を殺すーなんでいけないのか。“なんで”ではない、いけないものはいけない、駄目なものは駄目、これです。絶対的な否定、絶対的な禁止、これが絶対必要だと思うんです。

戦後生まれの私が、戦後の教育のことを言うのも変な話ですが、合理的に説明して、科学的に説明して説得して、解らせて、民主的に子ども一人一人を人格的に認めて、話せば解る、うちの子は何でも話して説明すれば解るんですよとか、私はクラスの子に何でも説明して説得して解らせる自信がありますと聞くと、「何でもですか?」と言いたくなります。

「なんで人を殺してはいけないか」ということは、解らせてはいけない、説明して解らせることではなくて、駄目なものは駄目だ、引きずり倒してでも駄目なものは駄目だと言わなければいけないと思うんです。

とにかく、人を殺しては駄目、何が何でも  
[図9]



駄目と言いたい。このことともう一つ、私は“強姦”一人間が人間を力で押さえ付けて自分のものにするというのは絶対的に駄目で、「何故」と言われても、駄目なものは駄目と言わなければいけないと思っています。なぜそんなことが言えるかという、“愛”一最後に愛と言ってしまうんですが、絶対的無条件の愛、それを子どもは要求するんです。私も要求します。私の母親は今も生きていますし、私は母親に要求するし母親は私に無条件で絶対的な愛を与えてくれていると、今でも心の底から信じ切っているんです。絶対的で無条件の愛は欲しいのです。少なくとも、母親は絶対的に無条件に私を愛してくれているという思いを持ちたい。ところがその無条件に愛されているかどうか分かるのは、実はその対局に“無条件の愛” [図9]、これがセットになっていると思うのです。

無条件で絶対的な禁止ということがない限りは“愛”ということも認められないし、実感として現実に目の前に現れないのではないかと、というふうに思うのです。

よくTVドラマにあります、家庭が裕福で、社会的身分も立場もある両親に育った娘や息子が非行に走ってしまう、何でも買い与え、小遣いも潤沢に与えて、好きなようにして良いと言っていたのに、いくら物を与えられ、時間を与えられ、お金を与えられても、子どもは愛されているとは思えない、自分は愛されていないのではないかと、ますます非行に走ったりする。遂に警察に捕まったときに、父親が呼び出されてやって来て、バシッと頬を叩かれた瞬間に、「私は愛されていたんだ」と初めて気づく、叩いた、禁止した、駄目だと言ったことに応じて、その子の

中に今まで貰っていた愛が、パッと実態を伴って現れるんだと思うんですね。与えられていたけれど分からないんですよ。それが愛だと分かるためには、その逆の禁止ということを与えられて初めて、今まで与えられていたのは“愛”だったのだとわかる。だから、無条件の愛が与えられているんだと実感するためには、無条件の禁止を与えなければいけないのですね。

つまり、人を殺しては駄目なんだ、或いは人を傷つけてはいけないとか、いじめちゃいけないとか、性的な虐待とか強姦とかは、とにかく駄目なんだ、無条件に駄目だということを、親が子どもに伝えられて初めて、子どもは親に愛されている—無条件の愛が実態として現れる。

絶対的な禁止と絶対的な愛は、セットになるべきであって、なっていないと“愛”ということが実感として伝わっていかないのだろうと思います。

この事に私が気づいたのは、やはりカウンセリングということでして、カウンセリングの一番の基本は“受容・傾聴・共感”なんて言うものではないんです。基本は枠なんです。明確な枠がある。つまり、時間と場所が明確に決まっています、この時間、この場所でだけ、「僕は君に共感するし、君と一体になって泣いたり叫んだり、悲しんだりするけれども、ここから一步出たら知らない、だから、いくら僕が君のことをこの場では、この時間は、本当に愛しいと思うし、心から心配していても、それはこの時間の中、この場所だけのことなんだよ。」ということなんです。それも口先だけ、そして50分か1時間の中だけで、共感をするんですね。そうしたカウンセリン

グというものが、何故そんなにクライアントに伝わるかということ、そういう枠があるからだと思うんです。禁止の枠というか、絶対的な、ここから出ない、僕は君と外でデートをすることもないし、愛し合うこともないし、ここだけの話なんだよというふうな枠の中で、ここからは出られないという禁止の枠の中で与えられる言葉であったり、共感であるからこそ、その言葉や共感に力が付くんじゃないかと思うんですね。

そういうふうにならざるを得ないというものであって、愛とか共感とか共有ということが力をもつためには、それと対になった禁止とか枠とかがあって初めて成り立つ。だから、無条件の“愛”が伝わるためには無条件の禁止、無条件の枠ということが相手に伝わらないとならないのではないかと思うのです。

時間が来てしまいましたので、纏めてみますと、学ぶのはやはり子ども本人だということです。、ただ、今のまま放っておくと、今の社会状況、マスメディアに囲まれた中で、様々な情報が入っていく。しかも、直接的に子どもに入っていくという状況の中で、やはり我々が自覚的に教える姿勢—共有するという教え方、一緒に考えよう—一緒に苦しもうというような教え方ですけれども、それが必要だということです。一般に言われる、普通に教えるということとは違うけれども、でも意図的な営みとしての子どもへのアプローチが、大人の側にもないといけないのではないかと、今日のお話しを終わりにしたいと思います。

どうも、ご静聴ありがとうございました。

〈教育講演〉

## 不登校と子どもの成長・発達

メンタルクリニック・ダダ

児童精神科医 大嶋 正浩

◎はじめに

私は、児童精神科医なのですが、日本には児童精神科医はあまりなくて、仲間内では臨床医師は百人いるかねと話しているくらいで、しばらく前にはトキみたいで、何時絶滅するかというような存在だったのですが、やっとこの4月から、初めて児童精神科領域に医療点数が入りまして（今まで児童精神科に特別の医療保健点数というのは一切認められていなかった）、20歳未満の患者さんの診療の特殊性が評価されるようになりました。

昨日も、お年寄りを襲ったという事件がありましたけれども、突拍子もない事件がよく起こるわけですが、あれなんかも学校では生徒指導上の問題は、ははっきりなかったという話なんです。しかし、あの子たちの短絡的な思考、その場で気持ち良ければいいとか、自分たちのやっていることを妨げられれば腹が立つというのは、実は普通の子どもたちにも一般にあることで、特別珍しいことではないのです。ああいう行動は何時でも起きるなという感じがします。

うちの患者さんでも、20歳になる前18だから、まだいいだろうということで、口うるさいばあさんをめった突きにしたという子どもがおりましたけれど、ほんとにけろっとしているんですね。そんなふうにとんどん人間が変わってきている、そこらへんの「何故こんな事件が起きるんだろうか」とか「何でこんな問題が起きるんだろうか」とか、児童精神科医はいつも見ているのですが、今日のお話では、そんなことが伝われば良いかなと思います。

話はいろいろ飛んでまとまった話が出来ないので、そのためにプリントを用意してきました。

最近びっくりしていることは、登校拒否の子たちが年々変わっていることです。もう、登校拒否の問題は言い尽くされたと思っていられちゃう方もおられるかも知れないですし、登校拒否はこんなものだろうと思ってる方もいられちゃうかも知れませんが、我々から見ると、登校拒否の子どもに関わっていて、毎回毎回びっくりさせられることばかりです。半年ごとくらいにどんどん悪くなっているような状況ですね。最近、検査結果ではっきり出てきて、ひどくびっくりしているのです。

浜松市があり、その北に浜北市があって、その周りに先日ワールドカップで有名になった森町や磐田や湖西という町があるのです。うちは浜北市にあって、山の方の森町とか磐田などから患者さんが沢山来て、浜松市からは意外に患者さんが少ないと思っていたのです。10年くらい前に仲間同士で話していた時に、仲間とは児童相談所とか浜松医大の児童の外来の担当とか、病院の小児科の心理の人とかですが、浜松からの患者は少ないよと皆が言うんです。人口58万の浜松市からの患者が、そんなに多くない。皆どこに行っているのかな、もしかするとどこにも行っていないのかも知れないという話になって、結論とすると浜松市の子どもは「サイレント・ゾーン」に入っている—問題をあまり起こさない時期に入っていると言うことですね。

これは東京でも（私は東京でも仕事をしていたことがあります）言えるんです。都心の世田谷の病院で、都心からくる子どもたち

よりも、川崎やその他の田舎から来る子どもたちの方が症状がはっきりしているし、率も多いという感じでした。都心ではもう症状が重くなっている筈なのに、意外に都心から患者さんが来ないというのが、世田谷での印象でした。そして川崎などではその頃、薬物とか家庭内暴力どころか、いろんな所で暴れてしまうということがかなりあったのです。浜松市でも10年前、中心部では同じように子どもがやって来なくて、中心部からはどこか体が悪い一胃が痛いとか、体のどこかが痛いとか、そんな子どもたちが多くて、周辺部、例えば春野町というところ、動物しかいない山ばかりの所から、思春期痩せ症の子が現れたり（昔は、痩せ症の子は中心部でエリートの子であったわけですが）、田舎の方で暴れる子とか家庭内暴力とか、不登校の子どもたちとか一杯来るという状況になっていたんですね。

われわれのグループで最近、浜松の真ん中の方にもクリニックを出して、次第に浜松の方からも子どもが来るようになって、どういうことが起きたかという、もちろん同じような症状でも具合が悪いなどは臨床的にも感じているのですが、ベテランの心理の先生が、ロールシャッハテスト（お聞きになったことがあると思いますけれど、投影法で深層心理の部分がよく見える検査です）で著しい差があるという話になったのです。どんな差かと聞くと、「浜松の中心から来ている子は殆ど分裂病みたいなものだ」というんですね。レベル的にはそんなものだろうけれど、どんなふうかと聞くと、「ロールシャッハ図版の認知が漠然としていて、客観的にちゃんと見られなくて、思い込みが激しくて、その図版を見て脅威感を抱きやすい。」でも、それだけなら、敏感で周りの現実をあまり見ていないというだけで済むんですけど、それだけではなくて「人を見ていないぞ」という話なんです。

図版で“人に見える”図版があるのですが、そこで人間のイメージが頭の中に定着しているかどうかなんです、「人が見えない、そんな子どもが一杯だよ」、そして人に対して脅威感もすごくあるし、「人が見えたとしてもすごい怖い奇妙な人だったりとか、脅威感だけだよ、そんなのばかりだ。」という話になって、やはり臨床と一致していると言う感じで、認知というか頭の中にできたイメージレベルも、全然違うものになってしまったのだということが、最近つくづく感じているとかびっくりさせられたことです。

同じように不登校している、ちょっと落ち着かない、或いは、引き籠もってしまったと言っても、人間のレベル—質が違ってきている、そこまでのことが起きてきているというのが、客観的な資料を含めて、われわれがびっくりしている現実です。

子どもたちも不登校に限らずどんどん変わってきています。昨日来た子どもが5歳なんです、この子は目がクリッとしていてマルコメ味噌の子みたいなんです。その子がパタパタとやって来て「先生、まだですか」「悪い悪い、もうちょっと待っていてね」、しばらくしてまた来て「まだやってくれないの？」「あと一人だから」。とてもしっかりして、人を見据えながら話す、一見みると元気がよくて積極的な子に見えるんです。診察室に来て、机にあるおもちゃを触ったりしながらお母さんと話したり、この子と話したりして、どうもお母さんの前だと話にくそうなので、「お母さん出ていって、二人で内緒話しようか」ということで、「内緒話で教えて、家の中でつらい事ない？」と言ったら、すぐ耳元に口を寄せて「お父さんが殴る」。率直にすぽんと出て来ました。でも率直にすぐ出てくるのは実は、可愛いのではないんですね。（それ以外にもお母さんはどう、おじいちゃんはどうと言う話は出ました）。

実はここがくせ者で、われわれも、先生方もベテランの方は感じていらっしゃるかも知れませんが、人懐っこい奴は具合が悪いという鉄則がありますよね。初対面から人懐っこい奴でまともなのは滅多にいない（笑い声）。これは確実なことで、この子は非常に人懐っこくて、家の秘密までこちらに家族を裏切ってしゃべってしまうと言うような子ですから、かなり??ということです。でもその後、お母さんに入ってもらって話していると、一生懸命横から口を挟んだりしながら、自分のことを伝えたくて仕方ないんですね。そのうち自分のことをお母さんが話し出すと、すーっと離れて遊び始めて、用心しているんだなと思われる様子、そして又、自分が突っ込めると思うと寄ってくると言うような元気な子でした。

何故問題になって来たかということ、保育園で自分の思い通りにならないことがあると、暴れる、叫び出す、人とすぐ取り合いになると激しい形でケンカになったりと言うことなんです。その場面を見ていると、この子は一瞬一瞬に賭けているということが分かるんです。すごい緊張感で生きている。この一生懸命さで他の子と取り合ったら、本気で生きるか死ぬかで取り合うだろう。それがありありと目に浮かぶ子でした。そこで生育歴を聞いていくんですが、実はお父さんは殴るんですが、おじいちゃんが無茶苦茶激しい人で、おじいちゃんの言うことを聞かないと、その家では生きていけない。そして奇妙な家で、おとうさん、お母さん、この子とおとうとの4人と、お父さんのお姉さんの家族、お父さんの両親という構成なのです。そして、おじいちゃんが一番先でないといけないというような家だったんです。すべておじいちゃんが先、だから赤ちゃんにオッパイをやっている、おじいちゃんのお風呂、おじいちゃんが何か食べたいと言って、全部途中で切られて子ど

もを見ているどころではなかった。それを、お父さんのお姉さんがすべて差配してした。そういうような中でお母さんは一時たりとも休まらないで、子育てができなかったようです。（下の子どもを妊娠したときに、そのお姉さんという人が「子どもはそんなに要らないから堕ろしなさい」という命令が来たそうで、これでお母さんは愕然として家を出たんだそうです）。その間、この子は勿論のこと、人見知りではなかったですし、後追いも殆どなくて、ベビーサークルに入れていて3歳までほとんど外に出したことがなかったそうで、保育園には行っていたのですが、非常にひよろひよろして色白だったそうです。（注：人見知り、後追いが無いというのは、人との信頼関係ができていないことを示す。）

そう聞くと、すごい家だなと思いますけれど、最近外来に来るのは、こういう突拍子もない子どもばかりです。子どもが3歳で母親が家を飛び出たのはまともなほうで、実家に行ったのですが、実家で受け入れてくれない例もままあります。

ただ、その頃から暴れることが始まったということですが、この子は良い思いを全然していないですね。小さいころからずっと不安で、自分が生きて行くための安心感とは与えてもらうことが殆どなくて、そういう不安の中で育って来た。そして保育園に行って、母方のおじいちゃん、おばあちゃんに世話されて、やっと自分の感情を出せるといった時に、生き延びるために一生懸命暴れたりする。

保育園の先生から「お母さんが甘やかすからこの子は自分勝手に、暴れたりする」と言われていたんですが、これがよくあるパターンで、（今日も、こういうことが最終的にはイメージ変わってもらえれば良いと思っているんですが）甘やかすとか我がままという文脈で子どもたちを見ていると、今の子どもたちは全然分からなくなってしまいますね。こ

の子は保育園の先生から、甘やかす、我がままと言う目で見られていたんです。

ところがこの子は、甘やかす、我がままだころか、自分を主張して自分の権利を守るために一生懸命なわけです。だからお母さんに「この子は戦うとき、生きるか死ぬか一生懸命でしょう」と言ったら、お母さんが「解ります、この子は一保育園の先生が言ったんですけれど一怒るとき血管が全部浮き出るので」。浮き出て怒り続ける、そして怒り終わったときに、パッと死んだみたいに寝てしまうんだそうです。無茶苦茶怒って、精も根も尽き果てたように寝てしまうんでしょう、そんな子どもなんですね。

この子がどんな気持ちで生まれて、自分の生きる安心感の無さ、それを何とかしようとしているのが痛いほど伝わってきます。もしこのお母さんが期待できないお母さんなら、こんなに暴れはしないんですね。このお母さんがその家から離れて期待できるから、この子は生存しようと前向きになって、自分の出来る限りの形で生存を求めて暴れているわけです。だから、お母さんとの関係は決して悪くないんです。ところが、それまでが余りに苛酷すぎたから、戦いの中で生きて行くことになって、今一度赤ちゃんの段階に戻してあげてやり直さないと、この子の平和な人生は無い、ずーっと戦う、でも意外に戦って運よく行けば社長さんとか、末は大臣かというように、具合悪い人こそ出世しますからね。

そういうふうに一人一人オリジナルで、外来では診ていくんです。何でこの子がそんな生き方しているのか、何でこの子が引き籠もらなければいけなかったのか、何でこの子が友達とうまく行かないんだらう。そういうふうに診て行くと、2～3年前の登校拒否と、最近の登校拒否の子では、全然人間が違って来ている、人とのつながりがなく、人との関わりを危険だと思っている子が増えてきてい

るんです。そんなふうに、不登校と言っても変化していると我々は思います。

### ◎早期からの理性的な子育て

「児童精神科医からみた現代の子ども」というプリントですが、12ページもあります。全部には触れられませんのでところどころ説明しようと思います。

なぜ、子どもたちの間に、いろいろな事件が多発しているのか。早期からの理性的な子育てというところで、これもよく話させて貰うのですが、小児科の先生もいらっしゃいますが、今、子どもたちが変わっていますね。1年くらい前、歩き初めてびっくりさせられたのですが、生後5カ月で歩き始めたという子がいました。本当かなと半信半疑でした。そして、ある学会で小児科や精神科の先生のいるところで、その話をしたら、その先生が、「えっ、うちの子、生後6カ月で歩き始めたよ。ビデオ撮ってあるよ。」と自慢げに言われました。「ああ、そうですか」「何かあるの?」「いえいえ、天才になるかも知れませんね」とごまかしましたけれど。

5～6カ月でと言うのは驚かされますが、10カ月で走っている子はよく見かけますね。眉間にしわ寄せて走っていたりしますが、その10カ月の子は、お兄ちゃんを連れて来ておられたのですが、その2歳くらいのお兄ちゃんは殆どしゃべらないで元気もない。お兄ちゃんは30分くらい女の心理の先生と遊んで、わたしが親と話をしたんですが、帰るときにはベッタリ心理の先生にくっついて「おねえちゃん、行く行く」と言って、手をつないでしがみついているんです。「この子、しがみついたり抱っこすることあるんですか?」と聞いたら、「いえ、殆ど抱っこされることは無いです」という返事でした。始めてこの子はすがりつける良いものを見つけたんです。それがお兄ちゃん、下の子は眉間にしわ寄

せながら10カ月で走っているわけです。早くしっかりしないと危ないのだ、のんびりゆっくり甘えてはいけないんだ、と身体で反応しているんですね。

極端な話をしましたが、不登校の子たちを診ていて、小さいころの話を聞くと、どういう生育歴が多いかという、まずは一般的に、人見知りがほとんど無い、後追いもあんまり無い、たまに人見知りがあっても極端な人見知りで、人と会うとパニックになるという人見知りはあるんですけど、自然な一抱っこされるとだんだん眉間にしわ寄せて、わーっと泣く、そしてお母さんに抱かれるとだんだん収まってきて、しばらくするとキャッキョと笑って、10分20分お母さんが話していると、だんだんその人にも慣れていくというような自然な人見知りが無いですね。

これもよく聞くことですが、昔日本では、人見知りの無い子はいい子だと言われていた訳ですけど、今の日本だと反対ですね。人見知りが無いということは、今もお話したように、他の人に抱かれて不安になるんですね。お母さんに抱かれると安心する。これが基本で、お母さんに対して安心できていることを示しているんです。それが、お母さんでも他人でも同じだという子は、人見知りしない訳ですね。自分のお母さんでも他人でも、ニコッとしておかないと「人生危ない」と赤ちゃんなりに決心するんです。だから非常ににこにこした子になる。お母さんが買い物に行っても、家で一人遊びしてちゃんと待っている。言うことも良く聞く。これで、素直で手のかからない良い子だったと言うようなことが加わると、「ああ……っ」というような感じで外来では診ていくしかない訳ですね。

今の日本人というか、自然に考えることを忘れてしまっていて、今の私の話も自然に考えれば、当たり前のことなんです。大人ですから、いろんな刺激に興奮したり楽しんだり、

あの映画見に行きたいとか、わーっと遊ぶと楽しいとか、ワールドカップで興奮しているわけです。大人はもう新しい神経のシナプスなど出来にくい訳ですし、新しい刺激に対してはそんなには反応しないのですが、2~3歳の子が云われた通りで、大人が困るような問題のことをしないなんて、普通であれば頭が壊れているのか考えなければいけない訳ですよ。おとなしくしているというのは、非常事態であることを示していると言って良いんですね。子どもだったら色のついたもの、動くものは、口に入れて見たいし、いじって見たい、開けて見たいし、ひっくりかえして見たい、というのが子どもである筈です。楽しい遊びだったら、「もう行くわよ」と言われても、「いや」と言って動かない。そんな状態が自然なわけですね。それが、初めから言うことを聞く、手がかからない、こんな大変な事態はないんですけど、それを今時の大人は「いい子だ」と言ってしまったり、なんとなくその辺の生育歴を見逃してしまう、ここでかなり障害が起こっているということ——もうシナプスの結合から問題が起こっているかもしれないと、専門の先生だったら思う筈の事態が起きていると言うわけです。

それからまた、どんなふうな子が多いかというと、小さい頃から早くしゃべって、これもびっくりするんですが、お母さんから過去を聞いてはっきりしているのですが、しゃべったのが生後4カ月と言う子です（20歳くらいになって“ボーダーライン”と言う病名になって現れていますけれど）。でも、10カ月12カ月で2語文をしゃべっている子は結構見ます。これなんかは、発達心理の教科書も真っ青ということです。そういう事態がおきています。この辺は極端なケースですけども、もちろんこういう子たちも、将来は具合が悪いのですが（レトルスペクティブに聞いたりとかプロブスペクティブに見ていても

悪いのですけれども)、小さい頃からしっかりしゃべれて、大人顔負けの、例えば「お父さん、タバコの吸い過ぎはだめよ」と冷静に2〜3歳でアドバイスする子とか(笑い)、ケンカしていると仲裁に入る子とか、3歳くらいでお母さんの相談役になっている子とか、こういう子がいますよね。

こう言うふうに、小さい頃から判断がよくて頭が良くて冷静で、大人より余程立派だと言うような子たちが、大人になった時にどうなるか、これは大体、激しくて衝動的で、自分勝手に無茶苦茶で、感情のコントロールが不良な人になっています。その小さいころの聖人君子みたいに落ち着いていた子どもで、安定して豊に成長するというのは滅多にいない。たまに、そういう生育歴のもとに大人になっても落ち着いていると、大体立派な表彰状ものの公務員みたいな感じになって、実は殆ど頭が壊れていると言った状態になっていると言っていていくらい[あっ、これはここだけの話ですね]です(笑い声)。

我々は、そんなふうな人ばかりを診ています。そういう中で、早期から理性的に子どもを育てると、子どもがやるべき“感情を興奮させて”、そしてそこで駄目を出されたりとか、諦めるまで泣き続けるとか一泣いて疲れて諦める—こういうことをしていないということが起こってきます。これが後になって非常に大変だということが、診ていると感ずることなんです。

我々のところの外来は、2〜3歳から来ていますし、子育て相談でいろいろ関わりがあり、集団療育や個別治療をしていますので見ているんです。それでは、そういう子どもたちがどうなるか、小学校くらいで出てくれればいいんですが(小学生、中学生、大人になって出る場合もあります)、こういう子ども達が正常発達に戻るためには何が必要かという

うと、外来に来た子が怒りっぽくてしょうがない、すぐ暴れるとかすぐ切れると言っている、そんな生育歴の子だと、この子も怒らせておくしかないよと言う話をしたりします。お母さんたちは始めは半信半疑だったり、何とかしなければとか、暴れているのを注意しなければとか、説得したりとか、いろいろやるんですけれど、これはほっといて、カーッとするのを納まるまで待つしかないと思います。「カーッとってお母さんに暴力をふるっても、後はケロッとしているでしょ」と聞くと「そうです。」大体こう言う子はケロッとするんですね。普通だったら人に怒った後は、恥ずかしがったりとか、友達に無茶苦茶したら後は尾を引くんですが、この子たちにとっては2〜3歳の子がぎゃーとなるのと同じものですから、後はケロッなんですね。2〜3歳の子は、怒って泣いてヒクヒクして10分もすると、抱いてもらってすーっと引いて、甘えたりベタベタしてきます。さっきまであんなに怒っていたのにケロッとしている。それと全く同じなんですね。

そんなことから、思春期のこどもたちは(抱いて「よしよし」も出来ませんから)そのままほっときなさいということなんです。ほっとく、つまり人がいないと何時迄も怒ってられないんですね。人がいなくても怒っているのがいたら、余程エネルギーがあるか入院が必要な子どもです。人がいないと段々落ち着く、そうすると納まってケロッとする。そして、もう少し良くなってくると「あんな馬鹿なことやってしまった」と思う。そこまで来ると随分よくなってきた訳です。小さい子どもと同じにコントロールが良くなって、その後この子たちは、親も「随分落ち着きました」と言うようになるんです。

小学校くらいでこんな具合の時は、抱き締めたり「よしよし」すればいい、沢山泣かせて泣き止むまで付き合っ

でコントロールが良くなってきます。と言うように、小さいときにやり残したことは、殆ど後でやり直すということを目の当たりに何時も見えています。

小さい時の生育歴は思春期の基本になるとよく言います。登校拒否でも子供帰りしない子は一人もいないですね。どこまで赤ちゃん帰り、子供帰りするのかは、その子の生育歴を聞くと大体予想がつかます。ですから中学2～3年で、あんなに暴れて夜遊びしていた子が（登校拒否で意外に夜遊びしている子は増えてきています）、親に聞くと非常に幼稚であることが分かります。例えば「この子は子供っぽいし、時々見てびっくりするでしょう」と聞くと、「確かに、考えていることが幼稚でびっくりします。」「そうです。でも、お母さんが見ているよりもっと幼稚で子供っぽいのですから、兎に角ひたすらよしよしと、騙されたと思って、今までの欠点なんかを言わずに、やってご覧なさい」と言います。そうすると、あんまり外出しないようになったり、お母さんのそばにベッタリするようになったり、「この頃あの子そばに来て、気持ちが悪いみたいです」というようになったりします。母親には「1歳の子と同じ、後追いなんですから」と言う話をするんです。理性では年齢相応のことを言うんですが、家での行動見ているとまさに赤ちゃん帰りなんです。

ある子ども（中学2年生）は、学校で「死ぬ」というメッセージを出して、先生方が大変になったのに、親は全然切実になっていない。そこで、先生たちに「大袈裟にして、親をびっくりさせて下さい。そうしないとこの子はやってしまうかもしれない。」ということで、親が来ました。子どもは今まで何も問題はなかった、成績もよかったしおとなしい子でした。でも、生育歴を聞くと、何も良いことはない。「この子は人間を恨んでいますね。だから、みんなに仕返す意味で死の

うとしているから、何かがあると本当に死んでしまうでしょう」と言う話をしました。

始めは半信半疑だったのですが、家でも“死ぬ”と言うことが多くなり、母親が焦り始めた。「とにかく今は、周りを引っ掻き回しているように見えても、この子を見ていかないと本当にやってしまうから対応しましょう」ということで、始めました。部屋に閉じこもっていることもあって、取り付く島がない状態だったのですが、「兎に角優しくしなさい、その子の生意気な言動に反応してはいけない、とにかく寄り添いましょう、でないと死ぬから。」ということで進んだら、（5月に始まって）今8月になって、お母さんがやっとにこにこして、「この子、変なんです」といいます。「どう変なの」「携帯でメールが入るんです、集合って」。お母さんは家に一緒にいます。そうするとお母さんが部屋に行くんです。そして「解散」でお母さんは出てくるんですね。。そんな遊びをしている。「それはいいことですね。そんなふうに一生涯懸命心配し続けなさい。そこまで行けば死にはしないよ。」というところまで行きました。こんな幼稚なことで、でも、この子が求めていたのはこう言うことなんです。親が自分の方を見てくれて、寄り添うことで一生涯懸命になっているかどうかを確かめたかったのです。

家で赤ちゃん言葉になっている中学生・高校生などはざらです。急にお客さんが入ってくるとしっかりした言葉になりますし、心配ないのです。そのようにきれいに赤ちゃん帰りになります。そして、そうした子どもたちは非常に健康的になって行く。こういう流れで確実に成長して行く状態を見るにつけ、早期からの「理性的な子育て」が問題だ、と言わないと、単なる理性的な子育て――早期教育に対しての嫌がらせにしか見えないですから、そんな前置きの話をしてしまいました。

◎食べることに困らない世の中になっている。  
命に関する緊張感がない。

このことが何故大事か。いかに、今いろいろな事件が多発していることに関係しているか。

昔の子育てと今の子育てを比べて見ると、今の子どもたちが昔風の子育てを受けたらどうなっていくかということを見ると、昔風の子育てを受けた子たちは殆ど今は、潰れてきますね。非常に萎縮しているか、非常に攻撃的になっている、どちらかになっています。どういうことかということ、小さい頃から、ちゃんと悪いことは悪いで殴ったりして（実はこれは大事だとわたし自身は思っているのですが）、昔風にやってしまうと、殆どの子は、大人を恨むようになっていきます。これは実は、おやじ狩りにしても、昨日の話の、仲間と一緒に爺さん婆さんを殺すということにしても、お気づきだと思いますが、学校現場で先生方が注意しても子どもたちが「何言ってんだ」というような、昔だったらその場では反発しても“されど先生”と言う感じがあったのが、今の子どもたちには“されど先生”と言う感じがなくなっていますね。今の子たちは、目の前では「先生」と言っている、裏では本気でなめていますし、大人なんていない方がいいと思っています。これが色々事件に関係しているんです。

昔と同じように早くから躱けると恨む。では、恨まないようにするにはどうするか。我が、登校拒否の子どもたちと、デイケアと一緒に寝泊まり（4～50人の集団です）していたりすると、10年続けていますが、中での子供たち同士では大きな問題は殆ど起きたことはないんです。二十歳や二十過ぎの子どもたちもいますから、帰りに飲んだりしますが、「危ない交友」とか、お互いの間で裏切るようなことはしない、ちゃんとした人間関係に戻って行く。実は大人がちゃんと子ど

ものことを大事にして「君たちのことを大事にしている、心配している」ということが、言葉ではなくても色々な形で伝わっていく子どもたちは非常に尊重しますね。例えば、デイケアなどで、少し羽目を外している時に、「お前達、いい加減にしろよ」「中途半端なこと、するんじゃない」などと怒ったりするんですが、そのことから変な形で反抗してということは先ずないですね。もちろん、そういうことは、個別の治療をしていても、関係がつかんと子どもたちは義理堅くて、こちらが考えている以上に大人を大事にする、つながりを大事にするんですね。

ところが巷の問題を起こす子たちは、本当になめていて大変な状態がおおい、或いは、問題を起こさない子の中にも、実は“なめている子”が多いんですがね。

そういうことと「食べることに困らない。」「命に関する緊張感がない。」ということがどう関わるかと言いますと、昔は大人が怒っても、大人がちゃんと食べさせていた、大人が子どもの命を守っていた、大人が子どもの事を一所懸命考えていた、というようなことが言葉ではなく、幼い頃から伝わっていたんですね。そして、生きていくことは大変だという緊張感があった訳です。それでも、時々子どもたちは、突拍子のないことをやりたい、悪戯もするし悪さもするし、その中で怒られて、「これはまずい、こうしないと世の中生きていけないんだ」ということが分かって、自然に大人になって行く。

今の子たちは、そんなことが無く、食べ物はいくらでもあって、何をしても、いい加減にしても成長して行って、生活は親が面倒を見てくれるなどと今の子どもは思っている。自分たちが生かされているという有り難みはあまり無い訳ですね。その中で躱けは出来ないんですね。仕付けしても恨むだけ、先生が怒っても先生を恨むだけ。昔は先生が

怒ると、「畜生っ」などと言っても心の中でずしっと思うことがあった。今は、非常に少なくなっている。

そういうように、大人との関わりが基本的に違ってきてしまっているわけで、さっきも言ったように、子どもたちを大事にしているということをつからせてやらないと、子どもは大人について来ないという状況になっています。そういう時に心理の治療などで、まずは行け止めて関係を作って、最初はとにかく受容するということが大事になってくるんですね。ただ受容して関係がついたら“躰け”なければいけないんですね。関係がついて気持ちに通じる人、自分のことを思ってくれている人が、道理の通った事で怒っても子どもたちは驚くほど、ちゃんと自分の中に入れてくれます。この辺が「心理」の方は、ある程度受容して、その人が自然に発達するところまでと言うことになってしまいうんですが、受容してちゃんと関係がついたと思うところでは、きっちり躰けなければいけない。

だから、怒ったり気合を入れたりすることは、子どもが大人になっていくためには非常に必要だと思います。怒られたことの無い子が大人になって、今どういうことが起こっているかと言いますと、企業でちょっと怒られるとすぐ辞める、恨む、すぐ諦める。それならまだ良い方で、怒られるとすぐ潰れてしまって、体に症状が出て休んでしまうという子どもたちも増えています。人間は怒られ、その後しっかりと救われたりというように、減り張りがないと、成長できないんですが、その減り張りが大事ですね。その前に関係が付くということが大切なのですが、そういう点で現代は、「食べることに困らない」「命に関する緊張感が少ない」というだけで、成長しにくい。これは良く考えて見れば、先進国の子どもたちがほとんど問題起こしている、一生懸命教育を改革している国においてすら問題

が多くなってきている、ということが物語っている訳です。ましてや、そういう改革があまりなされない日本においては、壮大な実験が起きている——どこまで子どもが崩れるのか（これも削除ですね）。

### ◎怒りの表出、喜び、興奮

これは、先のことと関係していますけれど、怒ったり喜んだり興奮しないで遊んで、そんなことで友達にはならないですね。外来で良く見るんですが、友達が沢山いた、どの子どもも仲良く遊んだ。物の取り合いも小さいころから無かった。そういう子たちに、思春期になって外来に来て関係がついたときに、「友達居るの、親友いる？」と聞くと、100%「居ない」ですね。安心出来る友達いない。当然ですね。ケンカしてその後、仲良くなったとか、夢中になって遊んで相手への配慮なんか忘れて、お互いに一体になって遊んで、そうして人と解け合うということを感じるんですね。その経験もしたことのない人が、親友が出来るはずがない。今の子どもたちは常に周りに気を使いながら、お互い遊んでいる。お互いの距離を測りながら、相手がいやな思いをしないように気を使いながら。だから一旦いじめが起きてしまうと、自分がいじめられないために安全な集団に入ろうとか、感情が爆発して「あいつを排除しよう」というときには、こんなに一体感があるとは思えないほど一体感を持ちながら一人を攻撃してしまう、ということが起こるのは、想像に難くないことなんです。そこで、いじめは止めましょうなんて言っても、初めて興奮したり、初めて生き生きと人に対して関わったのが“いじめ”だなんて言われる、そんなこと言われても止まらない。そんな子が沢山いるわけです。

子どもたちが興奮して、わーっと遊ぼうとするのに、大人たちはどうしても水を掛けながら遊ばせる。「こういう決まりです。」そ

うして大人がじっと見ている。こうして育った子は、興奮せずに遊びますね。また、TVゲームでしか興奮しないということも、大きな問題になっています。人との間で喜んだり興奮したり、ケンカしたり仲直りしたりすることが無い中で、本当の人間関係が出来る子どもたちが育つはずがない。それだけでも危機的な状態です。

◎大人の目を逃れて遊べる場所の無さ。常に大人の目を意識して緊張を伴う。

ですから、おとなしい育てやすい子どもは、その極端な例ですが、今の子どもたちは大人の目を意識しながら、良い子を演じているのは明らかですね。大人の目が届かない所で悪いことが出来る、本当は必要なんですね。今の子ども達は、それが得られるのが中学2～3年になってから（勿論、小学校5～6年でもあります）、家に戻らずどこかに転がり込んでいる、親も仕方がないと目をつぶっている無法地帯みたい。そして初めて大人の目を逃れてやれるわけです。そこらへんで幼児化してくる。そして、一杯悪いこととして幼児体験しながら、運よくその中で成長してくる子は成長してくるんですね。反対にここで中学受験があって、高校受験があって、大学受験があって、ずーっと大人の目を気にして、羽目外さずに受験して卒業した子は、就職しても殆ど役に立たない。企業も困っているという状況です。

小さいときに大人の目を逃れて子ども同士で、さわげる場所とか、そこそこの危険を伴いながら遊べる場所とかを、大人が確保しておくという配慮が、子どもたちに対して無いと、今の子どもたちはなかなか再生して来られないと思います。

◎地域で子育てする力が衰えている。自然が少ない、核家族。

こういうことは、ずーっと言われていますが、これが中心ではないということも頭に入れて置かなければいけないことですね。

そして、

☆親自身がこういう育児状況の中で、自己中心的しかも実体験の乏しい世界から抜け出していない。

これは先生方が切実に感じていらっしやると思いますけれど、浜松あたりですら既に、親御さんたちが殆ど赤ちゃんという状態になってしまっていて、お母さんが「子どもが登校拒否して」と言って来て、「大変だね」と言うと、突然、わっと泣き出して「私、どうして良いかわかんない」。そんなお母さんがちょくちょく現れ始めました。

特に、この頃目立つのが、反抗期の無かったお母さん。これは、反抗期が無くてどう生き延びるのかなということ、きれいにを見せてもらっているという感じなんです。反抗期が無く、親に手を掛けさせたことが無くて成長してくる。それでも100%問題を起こす訳ではなくて、先程言いましたように、具合の良い（エネルギーのある）子だけが問題を起こすわけで、エネルギーの無い人は間違っただけで子供を産むところまで行ってしまふんです。そういうお母さんが最近現れてきまして、その子どもたちが運よく具合が良かったり（感情が豊か）すると、不登校になることがあります。

変な言い方で分かりにくいかも知れませんが、子どもの方はいろいろ友達との間とか、学校での緊張感とかで不安なのですけれど、お母さんに話しても、お母さんは感情的になったことがあまり無い、自分が困ってその感情を経験していないんですね。すると子どもが困って不安になっていても、そこをすっくと流してしまうんですね。子どもが不登校になって、分かってもらいたくて手首切ったりしても、「ここで、どうしたら良いのか

しら、騒いでもいけないし、傷の手当しましょう」で済ませてしまう。つまり、心が揺れた感じが子どもに伝わらないで、子どもからすると何がなんだか分からないお母さんということになります。

1年も登校拒否すると、家出して男の子の家に泊まりに行ったりする、そうした時に、相談に来て、「男の子の家に泊まりに行っているんですけど、怒って良いのでしょうか、どう心配したら良いのでしょうか」と答えを待っているんですね。このくらい心配だとか、このくらい許せないとかという、自分の中に「心配の程度や尺度の基準」がないお母さんが多くなっているんですね。例えば、簡単に「心配した方が良いんですね」とか「心配しなくて良いんですね」というような、感情で捕らえる事が出来ないお母さんなんです。だから子どもの方も、いくら問題を起こしてもお母さんが気持ちで受け止めてくれない、そういうお母さんが増えています。こういう状態をみた時に、「お母さんは、小さいときにどうだったんですか」と聞くと、「特に問題はなかったので分かりません」という人が殆どです。ですから、お母さん自身にゆっくり成長してもらわなければ、当然子どもの成長に比べれば極端に遅いので、非常に時間がかかります。

そういうことを見ても、いかに自然な育ちが無いことが、2世代3世代目の問題になっているかがわかります。戦後、ずーっと出てきた問題の蓄積で、養育能力が無くなって、子どもたちの心が育たなくなっている日本の末期状態になってきていると思われまます。

その中の一つに登校拒否があると捕らえることが大切だと思います。

### ◎日本の教育の問題点は何か。

明治時代の教育が悪いとは思えないで、むしろ非常によい教育だと思います。

昔は学校に入る前に、大暴れして悪いこととしてケンカも沢山やって、その中で生き延びたり、自分の位置を確かめてから学校に来ている。そういう子どもたちが先生に、社会はこうなんだとか、生きる道はこうでなければならぬと真摯に教えられて、社会に目覚めて行くわけですね。今入ってくる子たちは、殆ど保育園以前という子どもたちが増えている。生意気な言葉は使えるけれど、人とどう付き合ったら良いかは分からない、仲間を作ることもなかなか出来ない。一見、話し合ったら仲間は出来るけれど、気持ちのうえで本当に仲間になることが出来ない。そういう子たちに、集団で仲間を大事に、思いやりの心をとって、思いやり以前なんですね。自分の気持ちもまだ育っていない状態で、思いやりも何も無い、集団も何も無いという子たちに、社会性を身につけさせたり、実践を身につけさせるといったことを一生懸命になって、そして、それに対して合わせてきている子たちは、先生の言うように合わせてくれるけれど、その中では息苦しいとか、そんなの全然関係ないと言って暴れて学級崩壊が出てきたり、或いは小学校高学年になると、暴れて収拾つかなくなるとか、または集団の中に入れたい自分の赤ちゃん的などころ一育ってないところを率直に出して、周りを意識して、敏感になった子どもは登校拒否になってくる。そういうことが起きているだけの事なんですね。

ですから、保育園以前のレベルから小学校1年を始めようという教育サイドの覚悟、もちろん、その前の保育園や幼稚園が、もっともっと小さい乳児を育てるといふところを受け持つ、或いはお母さんをも保育園として育てるといふところをやる、そういうことをちゃんとやってくれば、昔の明治風の教育をしても良いかも知れません。今は通用しない。形だけ昔の良き時代の教育をやっている。明治時代の本質的なところを真似ていかないと

いけない。人に対して本当に大事に思うとか、愛するとか一生懸命になるとか。でもその子の本質を見ながらやる、形だけで明治を追ってはいけないと思うんです。

◎近頃の大学を出た子どもたちが幼稚なのはなぜか。

ということは、今お話ししたようなことで良いと思います。

◎これからの子どもの世界はどうなっていくか。

・大人と、あるいは他の年代とつながることができず、敵対関係になりやすい。

・未熟な衝動が支配する

(衝動が分化されていない、社会化されていないですから、理屈だけで社会化されているつもりになっても、それは本当に衝動が社会化されている訳ではないですから。)

・表面的な論理に引きずられて極端な方向に走る。ヒステリー化。

(これは、政治そのものがそうですね。)

・情緒が乏しく、共感性がない子が増え、信じ難い犯罪等が増えてくる。

(これは、人を大事にしていない、人の痛みが分からない、そして実は子どもたち自身が今、死にたいと思っている子がとても多いんですね。死んでもいいや、生きている実感が無いんですね。生きている喜びをあまり感じていない。やはり、生きていて大事にされて、ふわっと良い気持ちを味合わない、生きていることが嬉しいとはなかなか思えないですね。)

同時に苦しい目にあってその後救われる、これもすごく大事なんですね。苦しいところを救われるというパターンが大事で、それがないと、幸せな気持ちになれないんです。苦しいままで救われないで、自分で、先程の話の子みたいに、自分を救っていっ

たみたい状態では、生きている実感はあまり無いんです。ですから、自分が死にたいくらいですから、でも死ぬのは痛いから嫌で、他人を殺しちゃおうという、これが子どもたちの自然な気持ちで、納得出来るんですけれどね。納得してはいけないのは当たり前ですが。

死にたいから、人を殺すことなんかはどうとも思っていない、そういう子たちが非常に多い。怖いです。)

・信じるもの、すぎるものがなく、新教宗教や、奇妙な集団に入る人は跡を絶たない。  
・精神的病気も、はやりでいろいろ出てくる。閉じこもる子どもも増えてくる。

(精神的病気は、はやりだと思ってもらえばいいと思います。どんどんはやりが変わってくる。アメリカでは多重人格障害が一番多いと言われています。日本もだんだん増えてきています。不登校も基本的問題なので増えてくるけれども、内実はどんどん変わってきている。思春期やせ症なども、著しく増えている。そんなふうには、社会の変化と心の病気は密接に相関しているのですね。)

・人と気持ちを共有することが極端に下手なので、人とあまり関わらずにスマートに生きていくか、近づいてきたさまざまな問題(暴力、性格の不一致、サドマゾなど)を起こす、あるいはくっついたりはなれたりする。

【人と関わりがすごく下手なのが、中学2～3年とか高校くらいで、セックスを切っ掛けに、くっつくことを覚えて、「今まで親や大人とはこんな幸せな良い気持ちになったことは無い」、「こんなに受け止められていると思ったことは無い」、という形でどんどんそっちの方向に行ってしまう。あるいは、そういう形でくっついて初めて、幼稚園のころの友達関係のようなものを味

わうものだから、くっついてはケンカして、くっついてはケンカして、ケンカして仲直りして、今の子どもはそうですね。20歳くらいの子でも、くっついたり仲直りしたり、そして二股三股かけて、それが仲間集団みたいなものなのですね。ほとんどが、その辺の気持ちの焼き直しをしている訳です。でも、その中で暴力が出て、暴力で人との関わりを深めようなんて（暴力も、一方的ですけど関わりが深まりますからーサドマゾなど）問題がいっぱい起きてくる。だから、表面が理性的でセクハラは駄目だとか、表面が奇麗になればなるほど、裏でこういう未分化な衝動（どこにも受け止めてもらえない色々な気持ちは、全部裏の世界で行われていくようになるので）、家庭の中はどんどん暴力と言い知れぬ状況の巣窟になって行くというわけです。】

・無気力な、身体症状、不定愁訴を抱えた子供が増える。

・新鮮な感覚、大胆な発想が出やすい。

（常識や共感がないから）

☆奇妙な存在の確かめ方や、奇妙なくっつき方や愛情の出し方をする人が今以上に増える。なんでもありどころではなくなる。

こんなことを、児童精神科医の窓口から考えています。

登校拒否の話に行きたいとおもいます。

不登校

◎問題が起こったときの対応の基本的な考え方

① 登校拒否をはじめ、精神的な問題を認めたときには、その裏に長い歴史、あるいは非日常的な事態のどちらか、（つまり長い歴史というのは、生育歴のなかで大変だったり、人とうまくかみ合えなかったり、非常に不安を押さえ込んで生きてきたりということがあろうし、非日常的というのはいじめとか、

親友からの激しい裏切りとか、そういうことで敏感な子とか不安の出やすい子は、それで人と一緒にいられなくなるなどよくあります）あるいは、その両方である。そのため、その子のそれまでの生きてきた流れをさかのぼることが、これからの子どもの関わりに有用にもなるし、子どものつらさをわかる一助ともなる。（よく間違ってしまうのは、学校に行っていないからなんとかしてあげようとか、この子と関わろうとか、無手勝流にその場の勢いだけで行ってしまいうんですが、その子が何者かが分からないと駄目なので、その子の生きてきた歴史をちゃんと味わってあげて、どんな気持ちでこの子が生きてきたのかということ、自然な気持ちで味わってあげることがまず大事になってきます。）

② ①の対応の前に、まず、応急的対応がある。子どもの気持ちは、追い詰められた気持ち、挫折感、不安と罪悪感

（当然、学校に行っていないという罪悪感が子どもは非常に強いです。）

また、同時に安堵感があると予想される。

（安堵感ー辛いところから抜け出したという安堵感。）

不登校することによって得た安心感をまず保障するところからはじめる。状況によって違うが、「ゆっくり休んでいいよ」「大変だったね」「自分がこれ以上大変にならないためのいい選択だね」「よく無理して通っていたね」等

（その子の状況を分かりながら、表情を見ながら言葉かけしてやるなど）が大事です。

（不登校した時、よく怠けと間違う場合があるんですが、怠けと言うのは最後の最後に考えればいい訳で滅多に無いんです。学校をサボって、それで良いんだという子は大物になるかよほどのアホかどちらかで、そんな人は滅多にいないということです。周りに沢山学校に行っていない子がいれば別ですけど、

自分が学校に行っていないと、その先の自分の人生が無くなるかも知れないという緊張感が無いはずないわけです。意識していないかもしれないけれど、感じていないはずは無いと思います。一見、いいかげんに見えたり、サボりに見えても、ほとんどが何かに傷ついているんですね。ですから、余程の思いで登校拒否したのだということを分かってあげると、やっと分かって貰えた子ども達はホッとしますね。)

③ 親への対応の方が複雑かもしれない。親自身、とても傷ついている、予想外に自分の子どもが不登校になってしまい、挫折感、不安、怒りなどで抑鬱状態になっている。また、学校に怒りが向いたり、休んでいる子どもに怒りが向いたり、また、自分自身に怒りというか罪悪感が向いてしまう。そういう気持ちをやわらげることが、親自身にも必要である。(今までの不登校の親御さんを見ていても、大体そのパターンです。学校に怒りが向くか子どもに怒りが向くか、まれに社会に怒りが向く人もいますが、お母さんも慰めてあげないといけない)。

④ まず、①～③の作業をじっくりやることが前提である。その部分をしっかり出来ると、親は子どもを受け入れることができ、子どもは、一度崩れた自信とプライドを再び創りなおすことになる。

(これは先ほどの、育て直したいな、或いは、子どもが自然に育ち直るみたいなのをして行けば、必ず良くなっていく。ただ、その育ち直しが今の子どもたちは、生半可な、赤ちゃん的というか、育っていないというレベルではなくてかなり凄いの、時間的には2年くらい掛かって一段落[でも4年位しないと1段落しない]という実感があります。)

ですから、不登校はゆっくり治療することが基本的には大切です。皆さんも経験されていると思いますが、半年くらいで再登校した

子の予後はあまり良くないですね。その後、また不登校になったり、半年くらいで再登校を繰り返していると、殆ど引きこもりになったりする。我々のところでは引きこもりは殆どいないです。最初から引きこもらせて、そこからゆっくり立て直していきますから、今更引きこもりは無く、先はだんだん人と付き合えるようになっていだけと云う感じですよ。かと言って、家にいて親も嫌になって子どもとは表面的にしか付き合わない、子どもに誰も関心を向けない、こうなると、いくら長く不登校しても全然意味がない。これは最悪ですね。面白いことに、誰も目を向けなくて不登校させておくと、1年半位すると再登校するんですね。そういう子どもたちが不登校になってまた現れるんですけれど、その1年半は「どうしていたの?」。子ども帰りも起っていないし、子どもに対して誰も本気に関わっていないし、でも1年半で再登校した。半年頑張ったけれどまた、不登校になった。休んでいても良い事がないと、こんなことしてられないと言うので、自分の気持ちを押し込め込んで行ってしまう子がいるんですね。それも何回も傷つくと、もう自分は駄目だ、これだけ一生懸命頑張ったのに社会でやって行けなかった、学校でやって行けなかった、もう自分には手がない、でも死ぬ勇気は無い、引きこもるしかないと言うのが、今の引きこもり一登校拒否からの一の一部ですね。

登校拒否もせずに学校に行っていて、辛いけれど自分もそれを自覚せずに、うまくいかなないと思いつつ、ある時パタンとなって、それからは諦めて全く学校に出ない、そういうタイプもいます。引きこもりはその二つがありますね。

不登校については大体、以上のようなことですが、時間が制限されていますので、全てをお話し出来ないのが残念です。

もう一つお話しして置きたいことは、先生方が不登校に関わっておられるということをお前に、少し発想を広げて貰えればということでお話しさせて貰っていますが。

### ◎人間の心の基本構造について考える

最近、PTSDという問題が出てきて、色々なことで傷つくと、それがトラウマになって、フラッシュバックしたみたいに昔の辛かったことが出てきたり、フラッシュバックしかけると、その時に自分の自我—自分の心に切れ目ができて、突然暴れだしたり怒り出したりとか、あるいは意識が途切れて、「私は誰？ここはどこ？」と云うような状態になったり、あるいは意識を失ったり、意識に変化が起きる、或いは、多重人格みたいに突然別の人格になったりする、そういうケース—解離状態になるケースが増えていますけれど、これからは登校拒否を起している子どもたちの中にも、この状態が今後5年くらいの間に増えてくることが予想されます。

子ども達を見るときに常に考えてもらいたいことは、今まで話してきましたように、あまり理性ではなくて、衝動の部分や感情の部分がどう育ったかということが大切だということです。意識の世界、無意識の世界ということはお聞きになっていると思いますけれど、理性と感情、意識と無意識をこういう図式で考えていただくと良いと思います(図参照)。心が傷ついた子たちとか、うまく人とやって行けない子たちに対して、理性の部分で働きかけるといことは、実は一時的には関わりがあるように見えても、殆ど意味がないんですね。やはり、感情の部分に働きかけて、そこが変化していかないと駄目なんですね。ところが、どうしても学校というところは“やるべきことはちゃんとやりましょう”とか、“友達には思いやりを示しましょう”“自主性をもってちゃんとやりましょう”とか、目

に見える部分を大事にする。これはさっきの明治時代の教育の話のように、感情的な部分が十分できた子を、理性で社会化して行くというところで有効であった訳ですけど、今はそこではない部分で問題が起きているわけです。ですから、登校拒否の子がある授業に出ていると、「じゃあ、この授業だって、居るだけでいいんだから出なさい」と云うふうに、行動本位にやっていると、子ども達はその圧迫でしばらくは頑張るんですが、何処かでまた挫折するんですね。それは心の面を見ていないことになってしまう。

やはり、無意識とか感情とか情緒の部分を問題にして、登校拒否の子たちと関わって貰えると助かると思うんです。それで、このような当たり前の図を出すのですが、当たり前ですけど、我々実践している人間に分かりやすいように—改編して分かりやすくしてあるんです。意識出来る部分がほんの僅かで、自分には無意識の世界が一杯あるんだと、まず、思っ貰うことが大事なんです。夢とか思いつきとか、第六感とか心、これはちょっと意識出来るんですね。意識出来ない部分にもっともっと沢山あるんですね。

そして実は、赤ちゃんが「おぎゃーっ」と産まれてから、あるいは生まれる前、胎児の時のお母さんの声を記憶しているなんて言われていますし、1歳2歳の子たちが、いろいろ経験したことは全部頭の中に入っているんですね。思い出せないんですが、無意識に1歳2歳の事の記憶は非常に大事なんです。ですから1歳2歳の時に、本当に大事にされたり、安心出来た子たちは、生涯に亘って安心感が持続するんです。小さい頃に、虐待を受けていたとか、1歳2歳で親が離婚したということ、自分の一部が何処かへ消えてしまったとか、「何時そういう悪いことが起こるか分からない」、「全部自分のせいなのは」といった気持ちの中に生きていくことに





## 【参考資料】

### 子どもの相談を受けアドバイスする時のコツ

#### よくあるアドバイス

- 「甘やかしすぎるから問題が起こるんだ。しっかり怒るべき事は怒ること」
- 「過保護すぎる」
- 「生活のリズムを整え、メリハリをつけましょう」
- 「運動をさせ、気持ちを発散させなさい」
- 「挨拶をしっかりさせるように指導しましょう」

上記の事は、誰でも、ある程度納得できるし、異論をはさみにくい事です。一部はもちろん正しい事です。しかし、このようなアドバイスをして、親がその通りにすると、「何にも気持ちなんかわかってくれないんだ」という反応になってしまいます。素人ではないので、もう一步踏み込んで、成長に対する理解して、アドバイスできる事が望ましいと思われれます。

#### どうしてもおちいり易い思い込み

##### 「のんびりさせると怠け者の大人になる」

大変な事から逃げる事も重要。いつも無理して自分の不安や辛さを抑えて頑張っていると挫折し易い子になる。引きこもりになる子は、大部分頑張っていた子。逃げざるを得ない辛さをわかって受け止めたり見守ってくれる人がいると、次回は逃げずに自分から頑張れるようになる。また人生のうち、怠けたり挫折する時期も必要。要は、そこからどう立ち直るかという事。

##### 「予習復習をして、やるべき事をしっかりやると将来も仕事ができる大人になる」

やるべき事をしっかりする事は、大人でもなかなかできません。ましてや、情緒が豊かでみずみずしくいろいろな誘惑に心が躍る子どもが、周囲から押し付けられたり期待される事に心を砕いてその通りにしていたら、どういう結果を生むでしょう。大人になった時には、覇気のない言われた事はやるが、それ以外のことには気が利かない人間になるでしょう。教育が成功して、現にそういう若者であふれています。

#### アドバイスする時には、以下の三点について留意しておく

- ① 情緒の発達の間からみる
- ② 遊びの面から見る
- ③ 発達心理的・医学的にみる

#### 情緒の発達の面からみる

1. そのままでいいんだよ、そのままで十分だよというメッセージを出してあげる。こうした方がいい、もっと頑張れという成長できない場合が多い。
2. 少し、図に乗って、失敗して痛い目を見て経験していくという繰り返しが生き生きとした心の発達につながる。子どもが図に乗っていろいろな事を試したり、生き生きと空想の中遊ぶ自由な時間や束縛されない空間を保障することが心の成長のための肥料となる。
3. 安心して包まれる状況で、不安は軽減し、変化へのエネルギーが蓄積される。幼い頃に帰って甘やかしてもらえ、ただひたすら信じてくれる、見守ってくれるという事が成長の大き

## 【参考資料】

なエネルギーとなる。

4. 周囲の人の、自然な生活の営み（いろいろ楽しんだり、仕事に真剣になっている姿、ぐちを言っているところ、夫婦喧嘩をしてまた何とか修復するところ、社会についていろいろ思っている事をふと漏らす）を通して、人の関係の持ち方や生き方を吸い込んでいく。

## しつけという面からみる

### しつけの基本、意味

- 気持ちの上で関係がついてから、しつけをする。親と十分に信頼関係がついていないうちには、しつけは恨みにつながる。
  - 周囲の真剣な感情の表出が、子どもに理屈抜きに価値基準を与える。
  - 周囲の何気ない日々の営みが、子どもに、生きていくための心のあり方の基本を提供する。
  - しつけが文化そのものである。子育て文化がその種族の生きていく力を決定する。
  - 物や食べ物が余っているように見える、苦勞せずに欲求を満たせることが、生きていく力を弱めてしまう。
1. 悪ふざけやいいかげんな状況が続いた時に、軽いうちは見過ごし、てくすねを引いていて一喝するなどというのもいい。
  2. 説教や、指導より、大人が本当に困ったり、本当に感激したり、さまざまな事にいろいろな思いを持っていることを子どもが傍から見ているということが、心を養う。食事時の家族の間での四方山話などはとくに重要。
  3. 極端にしつけたり、形にはめようとする、抑えられた衝動がさまざまな問題を起こす。例えば、他者に暴力的になったり他人に厳しくなったりする。他の人に向かえない時は自分に向かいこだわりになったり癖になったり自傷行為になる。自信のない子になったり卑屈になったりしやすい。自分を認める事ができなくなってしまう。また、自然な感情を出すのが下手になってしまう。
  4. 極端に放任であったり、自然な生活のけじめがないと、何を基準にして生きていいかわからなかったり、この社会の常識と折れ合うのが下手になってしまう。

## 児童精神医学的理解

診察室での関わりの中や日常の情報の中から、下記のことを理解して関わる。

1. 知能、情緒の成長を客観的に判断する。
2. 身体の成長と知能情緒の成長のバランスも含め、身体発達や染色体異常の可能性について判断する。
3. 癲癇、脳機能障害を含め、脳の器質的機能的障害を判定する。
4. 出産前後を含め幼小児期の環境、養育について、その子の情緒発達への影響を判断する。とくに、基本的信頼間の形成、母子間あるいは親子間での2者関係の成立具合、それらをもとに他の幼児や他の大人（近所の人、保母さん等）への関わりのでき具合。
5. 不安感や情緒的反応の混乱に伴うさまざまな症状について判断し対処する。

## 〈特別寄稿〉

〔本稿は、表題にあるとおり「日本つばさ協会フォーラム」での、講演内容を纏めたものです。小児がんに関する講演や研究発表は、今までにも何編か掲載させていただきましたが、その一環としてお読みいただきたいと思います。お話しの中での「図」や「表」などは紙数の関係で割愛させていただきました。ご了承下さい。〕

日本つばさ協会フォーラム

# 小児がん「より良い闘病・より良い支援」

— キャリーオーバーのフォローアップ —

あけぼの小児クリニック

順天堂大学付属病院

石本浩市

## はじめに

キャリーオーバーとは、「持ち越す」という意味です。小児期に当時としては致命的だった病気を治療の進歩により、その病気を慢性疾患として抱えながら、または治療しても思春期や成人の年代に「病気から発生した問題を持ち越す」ことをキャリーオーバーと呼んでいます。小児がんも今は約7割が治る時代になりました。また、小児がん以外の色々な小児難病も、治るようになって来ました。したがって全ての疾患でいま、キャリーオーバーが問題になってきています。

われわれは、病気の治療という良い結果を手に入れましたが、その一方で新たな問題に直面しています。これを皆でどう解決していくか、一緒に考えて頂きたいと思います。

## 小児がん経験者

1950年から1990年代にかけて、小児の急性白血病がどれだけ治療するようになったかというグラフです。急性リンパ性白血病は70年代の後半から急速に治るようになって、今は約8割が確実に治る時代になっています。急性骨髄性白血病も、化学療法だけで約半分は治るようになりました。という事は、70年代に3～4歳で白血病になった子供たちは、今もう20代あるいは30代になっているということになります。

ところが、皆がきれいに治れば良いのですが、様々な問題を抱えながら生きている人が少なくないのが現状です。小児がん患者が日本で毎年約2,500人発生していて、その約70パーセントが治るということは、1,500人以上の人が毎年長期生存者になっていることになります。この「小児がんを経験した人たち」が近い将来、次々に社会に出て来ます。アメリカの最近の統計では、15歳から45歳のヤングアダルトの約900人に1人は元小児がん患者だそうです。そういう時代になっています。

## フォローアップ外来開設まで

3年ほど前になりますが、私がフォローしている小児がんの患者さんの年齢分布を

グラフにしました。実際に発症する年齢は幼児期が最も多いのですが、こうしてみると1番高いピークが中学生位の所にあります。長年診療していますと、このような患者さんがどんどん増えてきて、15歳以上が60人位います。医療はますます進歩し、治るようになっていきますから、このまま右に平行移動して行き、やがて小児科の外来に30代、40代の人があるようになるかも知れません。それは本当は良い事です。しかし、考えなくてはならないことがたくさんある、とも思います。

<長期生存者>とは、治った人達を指す言葉ですが、言われている本人達には不愉快な言葉だと思います。そこで<がんの子どもを守る会>の当事者の会である<フェロー・トモロー>の人たちが、自分たちのことを<小児がん経験者>と呼んで欲しいというようになりました。そこで私はこういう言葉を使っているわけです。ところで、小児がん経験者も必ず通るのが、思春期です。この思春期というのは大変な時期で、健康でも色々な悩みを持つのに、病気を抱えながら思春期を迎えた人にとってはさらに乗り越えるのに困難が伴います。晩期障害の問題、進学や就職で差別されないか、そして結婚、出産、妊娠が可能かどうか。また産まれてくる子供が果たして健康な子供か、という不安も常につきまといます。

前述したように、毎年1,500人以上の規模で小児がん経験者が増えています。その中には晩期障害を抱えている人がかなりいます。当然それに伴って、社会心理的な問題も出てきます。この人たちをずっと小児科の外来で小児科医が診続けて良いのか、あるいは20歳になったからといって内科の先生にお願いしたとして、内科の先生が診てくれるかどうか。また、はたしてそれで患者が満足するかという問題もあります。

以上のようなことを考えた末、平成10年4月、私は長期フォローアップ外来を始めました。対象は年齢が一応16歳以上(高校生以上)、治療終了から何年か経っている人ということにしています。開設しているのは小児科外来ではなく、総合診療科の外来です。総合診療科というのは、今全国の大学で次々に開設されているのですが、臓器別の専門診療でなく、プライマリーケアを行う診療科です。

この外来を始めるに当たって、私は病院側の関係するスタッフを集めて話をし、事の重要さを説明しました。その結果、院長の許可が下りたわけです。外来の体制は、私を中心として血液内科の先生、不妊の問題で産婦人科の先生、脳腫瘍の患者さんもいるので脳外科の先生、必要があれば精神科も協力可、そしてソーシャルワーカーと看護婦、という形です。この体制であれば、晩期障害への対応、社会心理的な問題への支援、そして何か問題が起こった時に他科とスムーズに連携を取ることができます。

私ひとりだったら、いくら頑張ったとしても限界がありますし、内科的な疾患には対応できません。困ったときに快く速やかに協力してくれる仲間を作る、という事がとても大切なことだと考えました。

## フォローアップ外来の現状

### 1) 対象者

現在58人の通院者がいます。年齢は15歳から37歳で中央値が21歳です。その内の7人が結婚していますが、結婚しているのは全て女性です。2人が出産しましたが、健

康な子どもでした。経過観察期間は短い人で5年、長い人で28年、平均では約15年診ています。疾患の内分けは、血液疾患が12名、悪性腫瘍が46名です。

## 2)告知

いまは全員が告知されていますが、皆に早い時期に告知をした訳ではなく、私とご両親、子どもの3者が苦悩しながら、長い期間をかけてやっと「全て告知」に漕ぎ付きました。今年（'01年）1月に最後の1人に告知しました。この子の場合、親が強く反対し続けていたのですが、それを粘り強く何年もかけて説得し、ようやく告知に至りましたが、その後親が心配したような問題は起こりませんでした。

## 3)ひとつの成果

この外来を開いて、とても良かったと思う事があります。母子分離の一助になったかな、と感じられることです。小児がんの経験を持った家では、親子関係、特に母子関係が濃密になっています。母親には「可哀相な病気をしてしまった我が子を、何とか守らなければいけない」という強い思いがあり、子どもの方はそれにどうしても甘えてしまう、という構図があります。それでこの外来には、「高校生になったんだから、もう1人で来なさい」と言って、患者本人に1人で来させるようにしています。ほとんどの子が、1人で来ています。しかしこの外来を小児科で開いたとしたら、どうしても母親が付いて来ます。ですから私はこの外来を開設したことで、結果的に母子関係をなるべく正常に近いように戻す力が働いていると思いますし、本人の自立心も向上しているのではないかと思っています。

## 晩期障害

58人中23人、つまり約4割に晩期障害が認められました。C型肝炎、神経障害（癲癇）、心臓の障害などです。出血性膀胱炎の患者さんは、8歳で悪性リンパ腫を発症し、エンドキサンという薬で膀胱炎を起こしましたが、それから15年経つのにいまだに時々出血しています。膀胱鏡で覗くと膀胱がまだびらんしています。このような状態から膀胱がんが発生する率が、非常に高いのです。ですからこの患者さんは、ずっと診ていかなければなりません。その他にホルモンが出ない、移植によって髪が生えない、無月経、早期閉経、不妊、背骨の湾曲、また全盲という晩期障害もあります。全盲というのは網膜芽細胞腫が両眼に出来て、両眼を摘出せざるを得なかったお子さんです。糖尿病はエルアスパラキナーゼという抗がん剤で膵炎になりインシュリンを打たなくてはいけなくなった人です。大腿骨骨頭壊死もリンパ性白血病では有名な副作用で、約5パーセントの人が骨頭壊死を起こし、手術をする事も多いと言われています。特に思春期の女子でステロイド療法を受けた人はハイリスクだと言われています。

## 経過観察中に再発や晩期障害を認めた症例

フォローアップ外来を始めてから約4年経ちましたが、ずっと診ている間に色々なイベントが発生してきました。表の症例1は、13歳という小児がんとしては結構高い年齢の発症して、寛解していたのですが、17歳の時に再発してしまいました。これは

非常に困ってしまう例です。17歳で入院となると、小児病棟にスムーズに入れず、内科の病棟は老人の血液疾患で満床で中々入れず、大変苦労しました。このお子さんは特殊な移植を受けましたが、残念ながら合併症で亡くなりました。症例3は大腿骨骨頭壊死で、11年後に股関節が痛くなり整形で骨頭壊死と診断されました。残りの3例は再生不良性貧血の患者さんで、症例4は20年後、症例5は17年後、症例6は16年後に再生不良性貧血から骨髓異形成症候群に移行しました。こういう人達はキチッと診ていかないと、何処でどういう事が起こるか分かりません。長い間には色々な事が起こり得るのだという事です。

### 通院してくる人たち

2週に1度、私の外来に通ってきている女の子が描いてくれた絵で、彼女と私だそう。この患者さんは、3歳の時に急性リンパ性白血病を発症し、治癒して、今年(2001年)小学校1年生になりました。こうしてずっと、2週間に1枚ずつ絵を描いてきてくれて、そこに彼女のメッセージが書いてあります。どんどん絵が上手くなって、こうして文字が書けるようになって、私に色々書いてくれます。このような成長を見ながら、彼女もやがて大人になって行くんだなという思いで、いつも会っています。

この外来を始めて、私が診ていた患者さん以外にも、世の中には非常に困っている方々が結構いて、そういう人が来るようになりました。9歳で脳腫瘍になった方は結婚して他府県に嫁ぐのですが、そこでやはり自分の健康に不安があって、近くの大学病院の脳外科で自分のケアをして欲しいと言ったら、医者は治っているのに何で来たのかと全然意味が分らない訳です。また1歳で神経芽腫になって放射線を当てて側腕症になりずっと悩んでいた方は、元の病院ではもう治っているから来なくていいと言われ、でも結局問題は全然解決出来なくて相談に来ました。次の方は、2歳の時にウィルムス腫瘍と診断されて27歳で結婚しましたが、子供が出来ないということで、ある産婦人科から紹介されてやって来ました。告知は今まで受けていませんでした。

これは指の壊死で、この方は10歳で骨髄性白血病になり、初回寛解導入の時に感染して皮膚が溶けて結局指も切断という状況に陥ったのですが、とにかく若いし、何とかどんな形になっても指を残したいということで何とか指を残すことが出来ました。この女の子は現在18歳ですが、看護婦を目指して勉強しています。

PTSDという言葉が最近よく使われますが、約2割の小児がんの経験者がPTSDを持っているという報告があります。しかし、ネガティブなことばかりではなく、大変な病気を克服したという事が大きな自信になって、若いながらも非常にしっかりした人生観を築き上げている人も少なくありません。

次は11歳の時に下垂体症腫瘍である病院の脳外科で手術を受け、下垂体の機能不全で一生ホルモンを補充しなくてはならなくなった方です。そのホルモンの補充は別の大学病院の小児科でやっていますが、生理も来ないので婦人科で生理が来る治療も受け、身長も止まっているので成長ホルモンを打つという事をしている内に精神に異常

を来たして、吐き気を訴えるようになり、更に別の病院の消化器内科に通っています。ご覧になって分るように3つの病院の4つの診療科に行っているのです。どの医師も彼女の病気は診ているけれど彼女を人として診ていない訳です。彼女は非常にそこに不満があるのですが、どう言って良いかも分からないという状況です。

次は最近私の外来に来た患者さんで、非常に私がショックを受けた例です。とても象徴的な事例なので詳しくお話します。26歳の女性で1歳2ヶ月の時にある大学病院で右腎のウィルムス腫瘍と診断され、腎臓摘出後、腹部に放射線照射して、化学療法を受けました。今から25年も前の1975年、NWSというウィルムス腫瘍のプロトコールが出来てまだ5年目位の頃で、当時は放射線が主要な治療で、放射線療法が広く用いられていました。本人には「腎臓の病気で腎臓を取った」という説明しかされてなかったのです。彼女の母親も言わないで済めばそれに越した事はないと思っていました。本人も元気になって治ったしという事で、5年位通ってから、もう行くのを辞めてしまいました。ウィルムス腫瘍は非常に良く治りますから、特に晩期障害が眼に見えてなければ、簡単にオフ・フォローになってしまいます。ところが5年位前から生理の回数が減り、2年前から全く生理が来なくなってしまいました。婦人科ではストレスと診断され、ピルを処方されたところ、今度は血栓症になってしまい、緊急入院になってしまいました。この後、彼女は米国に留学するのですが、むこうの婦人科にかかったら早期卵巣不全と診断されました。普通の女性は50歳前後で閉経するわけですが、この病気の場合は20歳や30歳で卵巣の機能が廃絶して生理が来なくなってしまうのです。それで鬱状態になり米国で鬱病の治療を受けて帰国後にある大学病院の産婦人科を受診し、やはり同様の診断を受けました。一般には早期卵巣不全というのは自己免疫疾患だとされていて、治療法はないと言われて、更に違う病院を訪れてもまた同じことを言われてしまい、非常に落ち込む訳です。私はワーカーと2人で彼女の話をおよそ2時間にわたり聞きました。それで、では自分の病気をどういう風に思っていたのかと聞くと、「誰も言ってくれなくて、でもお腹に手術の傷があって、私は腎臓の移植を受けたのだと思っていた」と言うのです。「誰も本当のことを言ってくれなかった。でも自分で一生懸命に考えて、自分が誰かから腎臓を貰って移植を受けたのではないか思っていた」そうです。読売新聞の“医療ルネッサンス”というコラムに小児がんが治った人の記事が載り、そこにこの外来の事が紹介されて、記事を読んだ母親に勧められて受診したのでした。それで結局、原因は乳児期に腹部に放射線を当てたことだということが判った訳です。元々、思春期前に治療を受けて一切生理が来ないというパターンもありますが、彼女の場合は一旦生理が来ていて二次性徴もあって女性として成長しながら、20代で生理が止まるという大変悲惨な事でした。それで論文を調べたところ外国では多数の報告がある事が判りました。最初の報告は1976年で、その後、乳幼児期の腹部放射線照射の為に卵巣機能不全になったという症例の報告が沢山ありました。こういう事例を私達小児がん診療に携わっている者は殆ど知らなかったのです。私は急遽、経験豊富なベテランの先生方にこういう経験がないか尋ねてみましたが、誰も聞いた事もないという返事なのです。しかし、実際には欧米では何十例

という報告がある訳です。ではどうして我々は知らないかというと、結局この人たちは小児科には来ないので。問題は婦人科的な事ですから婦人科に行く訳です。そしてそこで話が終わってしまい、フィードバックされていないという事です。

これは1992年に婦人科の雑誌に報告されていた10例のまとめです。放射線照射を受けた年代は大体1～3歳で、生理が来なくなった年齢が20代です。病気はウィルムス腫瘍が多く、他に神経芽腫も昔はかなり放射線を当てましたし、卵巣腫瘍の報告もあります。

以上のように長い経過の中で、色々な事が起こりうる訳です。では起こった時にどうするのかという問題があって、元の病院とキチッと繋がってないと行く所がない訳です。そこが非常に大きな問題です。約半数の患者さんが晩期障害を持っています。10年以上経っても稀ですが、何かイベントが起こる事もあります。原疾患が治癒して、もう治ったから良いですと簡単にいう医者が多いのですが、オフ・フォローになったら、何か起こった時にもう行く場所がないのです。次の医療期間を探すのは非常に苦勞します。それでこういう試みをするようになったのですが、じっくりと話が出来るようになり、相談を受けやすくなりました。チームが出来て非常にスムーズに対応が出来ようになったという事です。

#### おわりに

結局誰が診るのかという事です。やはり小児科医が診るしかないのではないかと思います。勿論内科の先生にもお願いしたい時もありますし、お願いしなくてはならない時もある訳ですが、往々にして内科の先生にお願いした後に戻ってくる患者さんがいて、結局内科でフォローアップを受けながら、私の所へ来て1時間位話して行く人もいます。これは何故そういう事になるかというと、小児科医と内科医のフィーリングの違いがあって、私達小児科医は成長する人達を末広りのセンスで診ていますが、内科の先生達はどうしても人生の最後の方のお年寄りを診ているという、その感覚が非常に違うのだと思います。そういうのがもろに子供や親に伝わるのだと思うのです。

取り敢えずは現状ではこういうシステムでやって行くしかないのですが、今後もっと良い方法が出来るかもしれません。ご存知のように今度、国立小児病院が成育医療センターという新しいナショナルセンターになります。そこでは正にこういう問題を全科を挙げて取り組んでくれる事になっています。その成果に非常に期待を寄せています。

最後にもう一度告知の話をします。当事者に本当の事を伝えるということは、とても大切なことです。もちろん告知を早い時期にすることは、治療を円滑に進める上でも、とても大事です。しかし、最も大切なことは、この子達の生涯そのものに責任を持つのは、本人達だということです。親はいつまでも生きているわけではありません。ですから、本人に本当の事を出来るだけ早い時期に話し、健康管理も含めた自己管理をするように教育するということが大切なのです。告知は、そのために重要なことだと思っています。

〈特別寄稿〉

## 事故によって突然わが子を失った母親の思い

東海大学健康科学部看護学科 井上 玲子

はじめに

多くの母親は、子を胎内に宿したそのときから、子どもの成長・発達に希望を託し、子どもと共に人生を歩み始める。そして母と子は、日常の生活を通して愛情を育み信頼関係を形成し、絆をより深めていく。いつの時代にも母と子の関係は、豊かな愛を想像させる。しかし、突然予期せぬ子どもの死が母子間に襲って来た場合、残された母親はどのような心理過程に陥るのであろうか？

子どもの死に関する研究では、母親の長期にわたる闘病体験やターミナル期における予期的悲嘆に関する文献は多くみられる。また、小児がんに関してのみえば、才木<sup>①</sup>が子どもの喪失における母親の思いをネガティブな面にのみその特筆をみるのではなく、ありのままの姿を報告している。しかし突然死に関するものでは、乳児突然死症候群や産科領域の周産期死亡の文献に限定されており、我が国では突然死によって子どもを亡くした母親の体験を報告したもので、母親の手記以外は見あたらない。

突然死の中でも特に事故死は、残された母親にとって心の準備なしに子どもの死と対峙していかなければならない体験である。

「こんなことはとても乗り越えていけそうにない、と思いましたが。でも、選べる道は2つしかありません。お酒とかに逃げて自滅するか、それとも精いっぱいがんばって生きていくかのどちらかです。(10代の子どもを事故で失った母親)」

と語られるように、母親にとってそのショックは図り知れないものと想像される。

筆者は以前から小児がんや慢性疾患の親の会に参加し、家族からさまざまな話を聞いてきた。今回はその中でも子どもを亡くした家族の会で、事故によって突然わが子を亡くし、

まだ1年にも満たない2人の母親と出会った。その母親の体験は、病死とはまた異なる母親の苦悩を浮きぼりにしていた。そこで本稿では、この母親のありのままを語ってもらった内容を、若干の考察とともに紹介したい。

### 1. 息子が海水浴で溺死した30歳代の母親

#### (1) 信じられない出来事

「今でも信じられないんです。水泳は得意な方で、電話で連絡を聞いたときも何をいつているのかよくわからなくて。」

この母親は、1カ月前前に9歳の長男を亡くしている。親戚の家に宿泊し、海水浴を楽しんでいた矢先のことだった。子どもだけで親戚宅に預けていたため、事故の現場に立ち会ったわけではない。それが今も子どもの死を認められない引き金になっていた。

「ただいまって、今でも帰ってくるような気がするんです。元気な子でしたから、いつも遅くまで外に出かけては心配させて、暗くなってきて慌てたようにただいまって。」

子どもがいつものように、家に帰ってくる錯覚を今でも持ち続けている。検死にも立ち会い、49日の法要も行われた。母親にとって「いってきます」といって家を出て行った子どもの姿が目にも焼きついている。

子どもの死は母親にとって、何が原因であろうと納得のいかない理不尽な出来事であろう。しかし特に、母親にとって覚悟のできていない子どもの突然の死は、信じられない出来事であり、全く意味を理解できない現実となって我が身に押し寄せてくる。おそらくこの母親の悲しみは、信じられないという思いばかりか、フラストレーションや屈辱感などさまざまな思いを噴出しかねない感情となって彼女を責め続けていたようであった。

Kubler-Ross<sup>①</sup>は、臨死患者にみられる「否認」を健康な「対処法」として評価している。子どもを失った家族の場合も「否認」が同様の機能を果たし、崩れようとする自らを取りまとめ、自己防衛法として位置付けることができるのであろう。

## (2) 後悔

「何度も後悔しました。どうして海なんてやったんだろうって。何度も何度も。行きなれた親戚の家だったのでね、全くこんなことになるなんて考えてもいなかった。」

母親にとって、子どもを突然失うということは信じられないという出来事であると同時に、なぜこうなってしまったのだろうか？ どうしてくい止めることができなかったのだろうか？ など、さまざまな後悔に見舞われる思いが沸き出すのであろう。それは長期にわたる闘病の末、亡くなった場合でも、この治療でよかったのだろうか？ この選択でよかったのだろうか？ と後悔の連続であると同様とも考えられる。しかし、突然事故によってわが子を失った母親にとっての後悔の意味は、どこにその怒りをぶつけていいのか混沌とした状態であるのだろう。

Kubler-Rossは、家族は「否認」の後に「罪悪（自責）感」をもって反応しやすいが、この背後には「怒り」があると述べている。

この母親の場合、旅行へ行かせたことへの後悔、自分がついて行かなかったことへの後悔、助けてやれなかったことへの後悔など、子どもに起こったことすべてをくい止められなかった自分に対する罪悪感と自責の念を抱き、責め続けているようだった。

「どんなに苦しかったらどうかとか、冷たかったらどうかと考えると辛くて辛くて・・・」

その状況を思い描きながら、わが子を海で助けられなかった自分を罰するかのよう、悲しみを怒りに変えて何度も何度も吐き出しているかのようであった。

## (3) 悲しみの地雷

「毎日毎日息子のことを思い出すたび、まるで悲しみの地雷でも踏んだように、心の中が破裂しそうになるんです。もうバラバに心が砕けそうに・・・」

子どもを亡くすと、その子どものことばかり思い出して、ほとんど何も考えられなくなる母親は多い。これは悪い夢ではないか、目が覚めると何事もなかったかのように息子が傍らにいてのではないかなど、さまざまな想像が駆け巡るかもしれない。子どもの死を思い出せば思い出すほど悲しみに打ちのめされ、混乱し、怒り、無力感にさいなまれ、パニックに陥るかもしれない<sup>②</sup>。この母親の事故をめぐる出来事の思い起こしは、まるで地雷を踏んだかのように一つ一つが母親の身を破壊するほどの強さであった。

「小児がんの場合、母親たちは闘病中に子どもが苦しむ様子を見ているうえに、いろいろな場面で嫌でも覚悟をつけさせられることが多い。そのため子どもが亡くなる時楽になれてよかった、と感じる母親の方が多い。」と才木<sup>③</sup>は述べている。病死の場合、闘病時間というある種の麻酔によって、子どもの死が訪れても感情が麻痺していることが多く、逆に喪失という無力感に埋もれていると考えられる。しかし、事故死の場合、覚悟のない突然の死によって予期的悲嘆を体験することなく、同時期に否認、怒り、抑鬱等の臨死段階を体験しなくてはいけない。Rando<sup>④</sup>は、家族の悲嘆には、強い感情と泣いたり気が動転したりする体験は当たり前のことであると述べている。つまり愛しい人を失い、そのことを受け入れなければならない葛藤は、母親の心だけではない、身体をも消費させる多大なエネルギーを消費することなのであろう。

「今、こうしてここにいることも不思議なんです。私の身体はもうすでに半分死んでいるから・・・」

この母親の心の悲しみは、身体の痛みとして心と共鳴しているかのように感じられ、語る言葉の一つ一つが悲嘆という作業の響であるように感じられた。

#### (4) 頭の中にいる悪魔

「こうやって話をして悲しんでいた自分と、忘れてしまいたい自分がいるんです。まるで頭の中に悪魔がいるみたいにもう忘れてしまおうって思うときがあるんです」

実際に愛する人を亡くしてからの悲嘆は、プロセスで説明されることが多い。表現はさまざまであるが信じられない(衝撃)時期から相手がいないことを認め、新しい生活に適應していく時期までのプロセスであると捕らえることができるであろう。喪失したことによって起こるあらゆる感情に対処し、人の死は避けられないものであることを受け入れ、愛する人はもういない環境へ順應していくことでもある。

この母親の場合、子供を亡くしたことによって起きた衝撃と、そこから踏み出そうとする気持ちが波のうように押し寄せては引いていく。この波は心のバランスを揺るがせ、頭の中にいる悪魔として、母親の中に住みつき始めていた。この二つの心はその時々で母親の精神状態に影響し、悲しみを助長させるものと、死の適應を罪悪感に仕立ててしまうものとに分けられ、母親の感情を大きく揺り動かしていた。この混ざり合いが悪魔という存在として母親を恐怖感に陥れているのであろう。母親が波に揺られる時間の繰り返し、やがて安定するには、多くの時間が必要になると考えられる。

## 2. 23歳の息子が原因不明のまま 仕事で突然死した40代の母親

### (1) 孤独

「普段から無断で外泊することはあったんですよ。だからあの時もそう思って彼女のところにでもいるのかなって。そうしたら警察

から、お宅の息子さんではないですか、確認してもらいたって。もうびっくりして、何のことだか分からなくて…。あとは覚えていません。」

この母親は半年前、一人息子を亡くされた。勤務先の車中で死亡しているのが発見され、自殺、他殺、病死、さまざまな憶測がされたが、結局原因不明の突然死という結末だった。

「うちは商売しているのでね、息子が亡くなったからって、いつまでも店を閉めておくわけにはいかないから、主人が10日もたたないうちに(店を)開けたんですよ。私はなにか取り残されたようで、仕事もする気はないし、主人が腹立たしくて」

子供を失ったとき、家族の生活は変化し、さまざまな困難に直面せざるを得ない状況になるであろう。その変化と悲嘆の過程は、母親と父親では異なる場合もあると考えられる。一緒に泣くこともあれば、共に慰めあい支え合い、悲しみを共有し確認しあう夫婦もあれば、悲しみに対する表現方法が異なるがゆえに、誤解を招き、互いの心に距離ができてしまう場合もあると考えられる。

「うちは子どもが一人でしたからね。食事をしていても主人と二人だと話すこともなくて。主人はむっとしていて何もしゃべらないし、もうずっとこのままかと思うとやりきれない。」

夫婦で互いに悲しみを支えあい、生活を立て直す作業はもっとも効果的なグリーフワークといえるであろう。しかしこの母親のように夫との悲しみに対する態度や表現が異なる時、孤独感に陥ることが多い。また、夫だけではなく、友人や親戚などの対人関係が目だって変化し、社会的な孤立に立たされることもあるであろう。この母親にとって、子どもを亡くした家族の会は、唯一孤独から救ってくれる場所のようであった。

### (2) 仕事に復帰する時期

「仕事に戻るきっかけって、いつなんでし

ょうね。いつまでもこんなことしていちゃいけないって分かっているんです。他の人に迷惑をかけていることも分かっているし、息子が死んだことで、友人も随分なくしましたから。」

この母親に限らず、仕事に復帰する時期、または復帰したときの周囲の対応を非常に意識される家族は多い。突然死に限らず、子どもを亡くした家族に対する周囲の反応は、時に家族を苦しめることがある。「もっと休んでいいのよ」とか「大変だったわね」とか何気ない気遣いの声も、すべてネガティブに聞こえることがあるという。できれば自然に対応して欲しいと・・・この母親の場合、すぐに仕事に復帰した夫との感情のズレから、仕事をする機会を逃がしていた。また、店頭に出ることによって、近所の人と会話することさえも煩わしいと感じていた。息子の死の悲しみを他人と話すことは、途方もない勇気がいることだったのかもしれない。また、「立ち直るということは、元と同じ状態になることではない」とも語っていた。なんとかして、今の状態から抜け出さなければいけないという母親の心の葛藤であった。この母親にとって立ち直るということは、子どもと過ごした生活が再び戻ってくるということではない。子どもがいない現実を直視して、新たな生活を築いて行くことなのである。つまり残された家族は形を変え、その現実と共に新たな人生を歩み、生き続けていくのである。

#### <引用文献>

- ① オ木クレイグヒル滋子：闘いの軌跡 小児がんによる子どもの喪失と母親の成長。川島書店。東京。1999
- ② キャロル・シュートダシャー(著)；福本麻子(訳)：悲しみを越えて 愛する人の死から立ち直るために。創元社。大阪。2000
- ③ E・キューブラー・ロス(著)；川口正吉(訳)：死ぬ瞬間。読売新聞社。大阪。2000
- ④ Rando, T. A(1984): Grief, dying and death, Champaign: Research Press
- ⑤ 畠山とも子：ホスピス入院中の患者の配偶者が行う予期的悲嘆の特徴—夫婦の関係性に焦点を当てて—。東海大学大学院健康科学研究科修士論文。2000

#### <参考文献>

- ・ 田原幸子(編著)。及川郁子(監修)：予後不良な子どもの看護。小児看護 書5。メヂカルフレンド社。東京。2000

#### おわりに

人は育ってきた文化において、悲しい出来事にどのように対処していくか身につけている。男性は感情を抑制し、悲しみを心の奥底に押さえ込むことが男らしいと捉えられていることが多い。逆に女性は、悲しみ・抑うつ・怒りなどの感情を比較的自由に表現する。そのためだろうか、家族会などの参加者は、圧倒的に女性が多数を占めることが多いと感じる。本会も平日の昼間に開催ということもあって、参加者全員が女性であった。

悲嘆過程に陥っている母親にとっては、子どもの死を十分に悲しみ、悲しみと向かい合わなければ先へ進むことができない。そのためには語る場が必要であり、感情を表出し、自分で自分の陥っている状態を知ることが、心の中の重い苦しみを乗り越えるきっかけになるのであろう。突然にわが子を失うことは、予期悲嘆を経験せず悲嘆プロセスを歩まなければならない辛い体験である。我々看護者は、病院死以外での死に関することは殆どといっていいほどない。しかしあらゆる場を通して、グリーフワークに携わることが重要であると考える。(以下は息子を失った母親の手記)

「月はね、あの世とこの世ののぞき穴じゃないかと思うんですよ。だから、お月様が出る時は、あの子どもこっちをきっと覗いて見てるんじゃないかって。私も月に向かっておーいって話しかけるんです。するとなんかあの子と話ができるみたいでほっとするんです。」

## <研究実践報告>

### 研究テーマ

# 「心身症等不登校経験のある児童生徒の自立へ向けた支援の在り方」

(～子どもの心理的安定を図り、子どもが主体的に取り組む活動とその支援～)

北九州市立門司養護学校

校長 渡 辺 洋 一

本校、門司養護学校は、病院の併設がなく寄宿舎と学校が一体となった病弱養護学校である。市内に居住する病弱児童生徒が対象であるが、高等部は設置していない。

本稿では、平成13年度に北九州市教育委員会の委嘱研究発表会を開催した時の研究内容を基に、現在の状況や課題等について報告する。

### 1 研究を進めるに当たって

本校は寄宿舎併設の病弱養護学校である。

本校に在籍する児童生徒は、心身症等のため不登校となり、小・中学校から転入してきたものがほとんどである。そして、本校への転入後、殆ど児童生徒は登校が安定し前籍校に比べ出席率の著しい向上がみられる。

本校では『自立』を『児童生徒が自ら考え自らの力で社会参加できること』と定義し、児童生徒が登校し、集団へ参加できることが自立への第一歩、あるいは自立そのものであると考えている。そこで、研究テーマにある『児童生徒の自立へ向けた支援』を考える前に「なぜ本校では、登校できるのか」という視点から、その要因と考える「本校の特性」について述べることにする。

## <本校の特性>

### ○自然環境

#### ・学校周辺の環境

本校の前には海が広がり、後ろは山に囲まれている。児童生徒は学習時や寄宿舎に帰った後など、海に遊びに行くことがよくある。

そのことだけでも児童生徒の心を十分に和ませることになる。

### ○生活環境

#### ・寄宿舎の併設

児童生徒は月曜日から金曜日まで寄宿舎で生活する。寄宿舎では、規則正しい集団生活を通して、昼夜逆転などの生活リズムの改善を図り健康を回復している。また、母子分離により心理的に安定するケースや寄宿舎指導員の親身な対応により、家庭的な愛情を感じて安定するケースもある。

#### ・規則正しい食事の提供

昼夜逆転などの生活のため規則的な食事習慣が身につけていない児童生徒も多い。本校は寄宿舎併設のため、朝・昼・夕のおいしい給食が実施されており、児童生徒の情緒の安定や身体の成長に果たす役割は大きい。

#### ・異年齢の集団構成

本校には平成15年2月現在、小学部6年生から中学部3年生までの児童生徒が33名在籍している。寄宿舎では、年齢の離れた4～5名の児童生徒が一つの部屋で生活する。同年齢では人間関係を取りにくい児童生徒にとって、小集団における異年齢構成は、お互いの距離を取りやすくリラックスした状態で集団適応のスキルを学びやすい場となっている。

### ○教育的環境

#### ・日常的な教育相談体制

本校では、24時間体制の中で児童生徒を見つめている。夜10時以降は寄宿舎指導員3名と舎監（男子教諭）1名が泊まっており、児童生徒と関わるができる時間は多い。少

人数ということも考え合わせると、いつでも教育相談ができる環境が備わっていることになる。また、学校と寄宿舎との日常的な引き継ぎの他、関係機関（専門医・巡回カウンセラー・子ども総合センターなど）との連携、学部・学年や寄宿舎を含めての事例検討会、週一回の生徒指導部会等をとおして、児童生徒の様子や心の動きを教職員全員で把握できるように心がけている。

#### ・保健室の役割

児童生徒は、些細なことでも心が大きく揺れ動くなど、心に弱さを抱えている。心の揺れから身体に不調をきたし、頭痛や腹痛などを訴えて保健室を訪れることが多い。こうした児童生徒は、養護教諭の保健室での心のケアをとおして、身体や心を十分休め元気を回復することができている。

#### ・自立活動を中心に据えた教育課程

本校の教育課程は、各教科、道徳、特別活動、自立活動、総合的な学習の時間で構成され、教科については、小・中学校の教育課程に準じており、通常の学校と同様の教科書を使用している。しかしながら、本校で重視しているのは自立活動であり、学習指導要領から特に次の内容を重視している。

### 1 健康の保持

- (1)生活のリズムや生活習慣の形成に関すること。
- (2)病気の状態の理解と生活管理に関すること。
- (3)健康状態の維持・改善に関すること

### 2 心理的な安定

- (1)情緒の安定に関すること。
- (2)対人関係の形成の基礎に関すること
- (3)状況の変化への適切な対応に関すること。

特に「学校周辺環境」や「異年齢集団」を生かすために、活動としては、主として体験的な学習活動を行い、縦割りのグループ集団で学習に取り組めるようにしている。

このような本校特有の特性により、小・中学校では不登校だった児童生徒が、本校では登校できるようになり、情緒が安定し明るさを取り戻しているものと考えている。

## 2 研究テーマ設定理由

### ○児童生徒の実態から

本校に在籍している児童生徒は、不登校に加えて、心身症、自律神経失調症、喘息、アトピー性皮膚炎、てんかん、拒食症などの疾病や症状がみられる。同時に、集団不適応、自己中心的、情緒不安、学習空白による低学力といった課題がある。このような児童生徒が、「本校の特性」により本校に登校できるようになる。しかし、登校はできても教室に入ることができず、教室に入っても情緒が安定せずに授業を受けることができない児童生徒が少なくない。また、情緒が安定してきても学習に対する目的意識が希薄であったり精神的なもろさが依然として残っているケースが多くみられる。したがって「いかにして児童生徒の心理的安定を図るか」また、「いかにして児童生徒の主体性を育むか」ということが本校の教育課題であり、同時にこの課題に迫ることが、児童生徒の自立に向けた支援につながると考え研究テーマを設定した。

## 3 研究仮説

心身症等不登校経験のある児童生徒に「受容」「挑戦」「協力」「向上」という4つの段階での成長を意図したきめ細かな手立てを講ずれば、児童生徒は、情緒を安定させ自立へと進むであろう。

## (1) 研究仮説の設定

本校の児童生徒の実態からもわかるように登校でき情緒も安定してきたが、今一步前に踏み出せない現状がある。ある程度の回復がみられ「もう大丈夫だ。次は進路に向けての取組みだ。」と児童生徒自身が思っても、なかなか自分の思い通りに動けなかったり、次の活動に取組めないなどのケースが多くみられる。

本校の児童生徒は、登校はできているものの、自分に自信がもてない、自分で考えて行動することが苦手など、多くは依然として精神面でのケアを必要としている。これまで受けてきた精神的なダメージは深く、失った自信や人間不信を回復することは容易なことではないため、ていねいな段階を踏んだきめ細かな手立てが必要であると考えた。

そこで、児童生徒の行動や精神面の成長を4つの段階（受容・挑戦・協力・向上）に分けて見ていけば、児童生徒の変容がよりわかりやすくなり、それを分析していけば一人一人の自立への支援の手掛かりになるのではないかと考え仮説を設定した。

## (2) 本校でのキーワード「受容」「挑戦」

「協力」「向上」の意味

### ○「受容」

取組みの第一段階は、児童生徒のありのままを全教職員が受け入れ、イライラやストレスを発散させること、閉じこもりなどで他者を受け入れにくくなった心を開かせ、集団に適應するきっかけをつくることである。そのような心構えや働きかけによって、児童生徒は、「受容された喜び」や「自分を分かってもらえる信頼感」が芽生える。そして、児童生徒は、「自己存在感」や「自分に対する自信」をもつようになり、登校がより安定したものとなる。この段階を本校では「受容」と位置付けることとした。

### ○「挑戦」

本校への所属感や安心感をもち、自分に自信をもち始めた児童生徒は、少しずついろいろなことにチャレンジする意欲をもつようになる。さらに、自分の苦手なこと、これまでもう一步踏み込むことを躊躇していたことなどにも取組めるようになってくる。そこで、この段階を本校では「挑戦」と位置付けることとした。ここでは、自発性や積極性を促すこと、さらには、挑戦したことをやり遂げた達成感から、さらに自信を深めていくことをねらいとしている。

### ○「協力」

自分に自信をつけてきた児童生徒は、さらに安定し、自分だけでなく他の人のことも認められるようになる。つまり、自他の認識から他者理解へと進み、相互理解が深まることで他者と協力していくことができるようになる。この段階を本校では「協力」と位置付けることとした。互いに協力しあうことで一つのことが達成され、そのことから大きな感動と自信が得られることをねらいとしている。

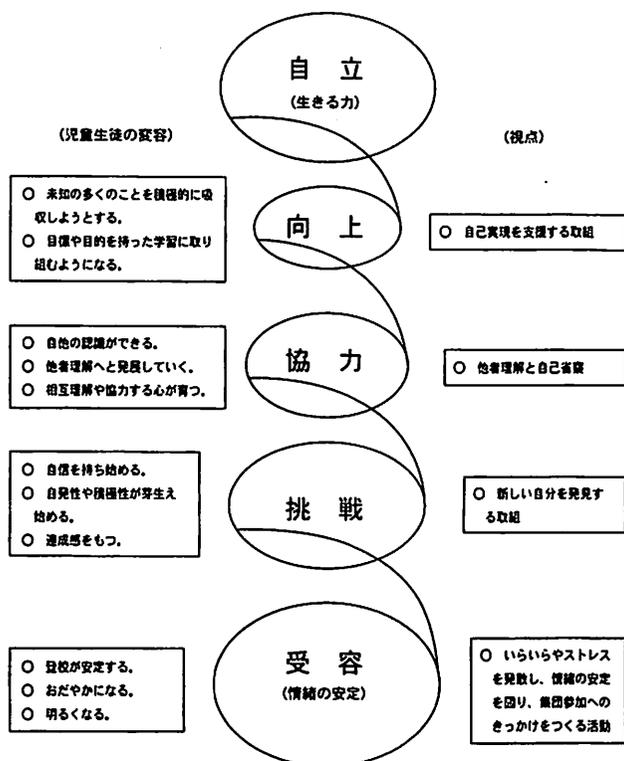
### ○「向上」

協力の意味を理解し始めた児童生徒は、未知の多くのことを積極的に吸収しようとし、目的や目標をもって学習に取組めるようになる。そして、自ら課題を見つけ解決していこうとし、自己実現に向かって具体的な行動が生まれてくる。この段階を本校では「向上」と位置付けることとした。こうした成長やこの段階まで変容した状況を「生きる力」が育ってきたと言えるのではないかと考えた。

## (3) 児童生徒の変容と取組みの視点設定

・「受容」段階から「自立」までの過程を4つの段階（キーワード……「受容」「挑戦」「協力」「向上」）に分け、その段階ごとに取組みの視点を設け、同時に児童生徒の変容を分析していく視点と考えた。

《図1 受容(情緒の安定)から自立へ》



研究担当者) が分かれて入り、自立活動の指導に統一性をもたせるようにする。

・指導の分析については、活動の成果と課題を考察するに当たって、教師の側から見えたことだけでなく、児童生徒にもアンケートを取ってその心情を問うようにした。

### (3) 自立活動の内容とそのねらい

①「受容」…(イライラやストレスを発散し情緒の安定を図り、集団参加のきっかけをつくる取組み)

○カヌー、ウォーキング、魚釣り  
(海や山に囲まれた恵まれた環境を生かし情緒の安定を図る。)

○スポーツ大会、プール遊び  
(児童生徒の好きな球技大会やプール遊びで思いっきり体を動かしてストレスを発散する。)

○作品作り

(陶芸など、素材に向かうことを通して心を落ち着け、情緒の安定を図る。)

②「挑戦」…(新しい自分を発見する〔自覚性・積極性を促す〕取組み)

○釣り体験

(学校近くの海で釣り体験をし、みんなと楽しむことで所属感を味わい、みんなとやれる自信を持つ。)

○カヌー体験

(手作りカヌーを学校近くの海に浮かべて漕ぎ、全力を出してやり遂げた達成感を味わい自信を持つ。)

○スキー体験

(人工芝スキー場で初めてスキーを体験し滑れる自信から新たな意欲を持ち、みんなとやれる自信を持つ。)

## 4 研究の実際

### (1) 自立活動について

・スポーツ大会、宿泊学習、茜キャンプ(人工芝スキー)、文化祭、釣り・カヌー、野外調理、駅伝大会などの取組みに自立活動の指導を生かす。

・指導内容の継続性及び指導時間数などから各教科や特別活動、総合的な学習の時間を弾力的に運用する。

### (2) 留意事項

・指導方法については、各行事や体験活動などの取組みを中心に、児童生徒が自分なりの課題をもって、自分なりのペースで取組めるようにする。

・指導体制については、体育的行事、文化的行事、遠足・宿泊行事、総合的な学習の時間といった校務分掌に、自立活動担当者(主題

③「協力」…（他者理解を促し自己省察力を深める取組み）

○駅伝大会

（活動の中で友人の頑張りに気づき、協力することの意義を見出す。）

○表現活動

（文化祭での演劇や合奏・合唱などで、互いに協力することで、より高いものができることを体験し、共同活動の意義を見出す。）

○野外調理

（活動を通して協力することで、献立が完成する喜びを感じると共に友人の新たな一面を発見する。）

④「向上」…（自己実現を支援する取組み）

○カレーコンテスト

（新しい場所や場面で、緊張したり不安になったりする状態を軽減し、自己表現できるようにする。）

## 5 研究の評価

### (1) 児童生徒の変容

#### ①心理的安定

児童生徒の反省作文等から、『ぼくが門司養護学校に来て、もっとも勉強になったことは「友達の大切さ」です。人間関係で悩んでいる時、いろいろな事で友達が相談にのってくれました。受験勉強を一生懸命ここまでがんばれたのも、友達のおかげだと思っています。』『私は、この学校に来て本当に良かったと思います。もし、この学校に来なかったら自分はどうなっていたのだろうと思うことがあります。この学校でもっといろんなことを学びたかったです。』などの意識の変化が見られ、これまで不安定だった児童生徒が、友達や先生との関わりを通して、情緒が安定し主体性の発揮が感じられるまでに変容して

いる。

#### ②主体的な取組み

・各行事や体験活動の班や係活動の中で「自分の意見を積極的に発言できる」「発言はできないけど協力することはできる」など個々の実態に応じて、互いに他を認め合ったり、それぞれが自分のできることで参加、協力するなど、変容のステップを踏んでいる。

・茜キャンプ（人工芝スキー）のレクリエーションの目標は「自分たちだけで考えて、自分たちだけでやり遂げる」だった。話し合いや練習、そしてやり終えてのアンケートでは『とても楽しく、やりがいがあった』『やり遂げられて自信がついたしやってよかった』など、前向きな意見がでており、自分なりに目標を定め次のステップに進もうとする様子が見える。

### (2) 教職員の変容

#### ①多様な実態という共通認識

児童生徒の背景や精神面での成長の段階は複雑に違っている。不登校という言葉で児童生徒を画一的に見るのではなく、多様な実態があるという前提から、児童生徒の理解や支援を行おうとする意識が定着した。

#### ②児童生徒の共通理解と適切な支援

個人ファイルを作成し、4つの段階（「受容」「挑戦」「協力」「向上」）を意識した事例検討会を実施した。また、各活動後に担当者が児童生徒の活動の様子やアンケートをまとめ、その結果を全教職員に周知したことなどから、実態把握や変容について全教職員での共通理解ができた。そして、個々の児童生徒の行動所見を細かく分析することから、個に応じた適切な支援の在り方が明確になり同一步調での対応につながっていった。

## 6 現在の状況と課題について

平成11年度から13年度の3年間の委嘱研究を通して、上述したように心身症等による不登校児童生徒の支援の在り方について一応の成果を得ることができた。関係機関との連携が日常的な行為となり、全教職員が同一歩調で個々の児童生徒に対応できる基盤ができたことなど、組織的な支援体制が整った。その結果、児童生徒は、学校及び寄宿舎での生活を通して、情緒も安定し友達とのつき合い方や問題解決方法などについてのスキルを学び、精神的な面でも成長がみられ、明るさと元気を取り戻してきている。

しかしながら、児童生徒の中には、家族に対する不満、家に帰りたくない、家が面白くないなど、家庭での居場所がないことへの不安をいんでいるケースがみられ、土曜・日曜日や長期休業日に家庭に帰っている間に、精神的に不安定になってしまうケースも見られる。また、保護者の本人への関わり方のまずさが、本人の心の傷をより深いものにしていたり、保護者自身（特に母親）が不登校の問題から情緒不安定の状態になってしまったケースもある。あるいは、母親が体調不良だったり仕事が忙しすぎて、不登校の問題解決のために力を十分に発揮できないケースも見られる。

このような家庭環境が、不登校状態をより悪化させている要因になっていると考えられることから、家庭支援の在り方が大きな課題となっている。

本校では現在、関係機関との連携、家庭訪問、専門医（市教育委員会が精神科等の医師などに委嘱、年間10回程度の教育相談等を実施）等の教育相談などをとおして家庭支援を行い、ある程度の成果をあげている。

本校に就学する児童生徒は市内に居住し、病弱養護学校での教育が適切であり、寄宿舎

生活が適切であると市教育委員会が判断したケースである。また、本校は北九州市の東方（門司区）に位置するが、都市高速道路を利用すれば車で市内間を60分以内で移動できる所にある。このような就学状況や時間的・距離的な立地条件も家庭訪問や関係機関との連携が容易にできている大きな要因ではないかと考えている。

家庭支援の在り方は様々である。A君の場合、週始めにつまずくと閉じこもりがちになってしまい、保護者等の支援ができにくい家庭である。そこで、登校できない状況が続いた場合、担任が日曜日や月曜日の早朝に家庭訪問して登校を促したり、保健福祉担当者との連携も図っている。B君の場合、家族間の行き違いに悩み、心の傷を深くしていると考えられることから、本人及び同居している家族に来校していただいて、管理職も含めて家族会議を実施している。C子さんの場合、父親が厳格で本人への接し方がきびしく、父親の本人への関わり方に工夫の余地があると考えられることから、専門医の教育相談や家族会議を実施している。その他、母親の体調が不良で、本校入学前から関わっている家庭相談員や子ども総合センターの職員と連携し、親族の協力を得ながら登校を支援しているケースもある。

不登校になってしまった要因は、児童生徒一人一人違っている。同時に、家庭内の問題はより複雑であり、学校として踏み込みにくい部分でもあるため限界も感じている。しかしながら、不登校の本質的な要因が家庭環境にあると思われるケースが多く見られることから、児童生徒の真の自立へ向けて、校内での支援体制と家庭支援の在り方について、研究成果を基に、今後も探求していく必要があると痛感している。

## 中学部総合的な学習

「ハロー！達人」「プチ弟子入り」の取り組み

米子市立米子養護学校中学部

渡邊直子 鉄井 恵 山下 英

### I. はじめに

本校では、年々心身症を併せ持つ不登校の児童生徒の数が増加している。今年度は中学部に在籍している14名のうち12名が不登校経験のある生徒である。

今年度の総合的な学習では、日頃狭い人間関係や社会で過ごしている生徒たちに、実際に外に出かけ、人やものと触れ合い交流していく中で、自分自身を見つめたり、考えたりする機会を持たせたい、という願いからスタートした。

人に会うことや、初めての体験に苦手意識を感じている生徒も多いため、まずは様々な分野で活躍されている達人に会い、そこで体験活動をおこなう、という「共通体験」から始め、さらに自分の興味、関心のある分野に広げて、そこで活躍されている達人について調べる、といった段階を踏むように計画した。最終的には、自分で調べた「達人」のもとで、学校を離れて3日間の体験活動をおこなうことを目標にした。

今回の大きなテーマは「交流（人やものと関わる）」である。生徒自身が、興味関心のある分野でスペシャリストとして活躍されている人を訪ね、お話を聞き、さらにその「達人」のもとで実際に仕事を体験する。「達人」から仕事への情熱、こだわり、などを聞き、達人の生き様を目の当たりにすることで、生徒たちが自分を見つめ、自分の生き方を考えていききっかけとなれば、と考えた。

### II. 学習内容とねらい

テーマ 一 交 流 一

タイトル 『ハロー！達人！』

[ねらい]

体験活動を通して他とのよりよいかかわり方を身につけることにより、自分の考えや意見を持ち、それを表現できる生徒の育成を目指す。

- ◎ 地域の人々との交流や体験を通して、コミュニケーション能力の向上を図る。
- ◎ 地域の人々との交流や体験を通して、自己表現力の向上を図る。
- 地域の人々との交流や体験を通して、自分の課題を見つけ、追求することができる。

活動計画は、資料1を参照。

### III. 活動の流れ

1. STEP 1 みんなで達人に会いに行こう！

①共通体験（12時間）・・・講話＋プチ体験ができるような活動

（ワークシート1～7を使用したか、省略する）

毎日、学校と家庭との往復で、しかも学校への登下校は保護者による送迎が多く、生徒の日常生活は限られた狭い範囲にとどまっている。そこで、生徒の視野を少しでも広くし、コミュニケーションの機会を増やすため、とにかく、生徒を学校の外の世界に連れ出すことにした。様々な交通機関を利用して現地にたどり着くだけでも大冒険である。そこで講話を聞き、プチ体験をして、様々な人やものとの出会いを楽しむことができるように、そして自分が何に興味があるのかにも気づいてほしいと願って、以下の4つの分野の達人を訪ねた。各分野ごとに数人の達人候補をあ

資料1 活動計画

学 習 計 画	学 習 内 容 と ね ら い	時 間	備 考
	ガイダンス ・本単元の全体的な流れを把握する。 ◎積極的に参加できたか。	1	
① 達人に会おう！	講話 共通体験 「自然の達人に会おう！（水鳥公園）」 「文化の達人に会おう！（ガラス工房）」 「産業の達人に会おう！（王子製紙）」 「福祉の達人に会おう！（なかよし保育園）」 ・達人の話を聞き、ともに体験する。 講話・共通体験について、アンケートに記入する。 ・ワークシートに記入した内容について互いに意見交換する。 ◎積極的に参加できたか。	12	(校内1時間+校外3時間) ×4
	課題設定 ・興味のあるテーマを選択し、課題を設定する。 ・選択理由や活動計画をワークシートにかく。 ・設定した課題や活動計画を互いに確認しあい、意見交換する。 ◎自分交流したい達人を決め、自分なりの課題を持ち、活動の計画を立てることができたか。	2	
<p>*夏休み中に自分の計画を見直したり、ふくらませたりしておく。 *自分のテーマや交流先について調べる。 *教師は、夏休み中にそれぞれの生徒の交流先を手配する。</p>			
② 達弟子に入りましょう	調査研究 ・場所確認・お願いのあいさつなど見学・体験のための具体的な準備をする。 ◎興味関心をもって、主体的に準備を進めることができたか。	14	関連・社会科学 「身近な歴史」 「身近な地域を調べよう」 「現代社会を探ってみよう」
	体験 ・それぞれの体験に従って、見学・体験を進める。 ◎試行錯誤しながら、取り組むことができたか。 ◎様々な人やものとふれ合うことができたか。	24	校外 6時間×4回 関連・自立活動 同和教育
③ 達人を紹介しよう	まとめ ・見学・体験したことや達人とふれ合うことを通して得たことをまとめる。 ◎課題解決していった過程を試行錯誤しながら、自分の方法で表現することができたか。	14	達人マップ等 関連・社会科学 「身近な歴史」 「身近な地域を調べよう」 「現代社会を探ってみよう」
	発表 ・自分の体験を発表し、友達の発表を聞き、感想を持つ。 ◎自分の考えや感想を伝えることができたか。	2	学習発表会 作品展
	反省 ・本単元を振り返る。 ◎自信や達成感を味わうことができたか。	1	関連・自立活動
合計			70

げ、ビデオや写真などで紹介したあと、生徒の希望も考慮して、下記の◎印の達人のもとに実際に出かけた。そして、そこでの共通体験をもとに、自分の興味関心と照らし合わせて課題設定できるように考えた。

『地域の自然の達人』（3時間）山下・渡邊

- ◎・水鳥公園（神谷さん・・・）
- ・日野川（日野川河川事務所・・・）
- ・チルネット
- ・米子市環境課（高森さん・・・）
- ・ボランティア活動

『地域の文化（国際交流も含む）の達人』（3時間）鉄井・白川

- ・陶芸家（鈴木君のお父さん・・・）
- ・伝統工芸（緋をつくっている人とか・・・）
- ・創作活動（神藤さん・原田さん・・・）
- ・地域に住む外国の人々
- ◎・ガラス工芸（スタジオイマージュ）

『地域の産業の達人』（3時間）京野・田中

- ・第1次産業（農業・・・）
- ・第2次産業（製造業・・・）
- ・第3次産業（販売業・・・）
- ◎・王子製紙（向井さん・・・）

『地域の福祉（健康・安全・人権も含む）の達人』（3時間）松居・石田

- ・高齢者施設（みどり苑・・・）
- ◎・保育園・幼稚園（なかよし保育園  
・みどり幼稚園・・・）
- ・病院（国立病院・・・）
- ・ライトハウス
- ・ボランティア活動
- ・手話

②課題設定（2時間）・・・共通体験を通して、自分の興味の方向をしっかりとか

ためて、課題を決める。

（ワークシート8～11を使用した省略する）

日頃、興味関心といえば、アニメやゲーム、テレビタレント・・・と考えている生徒達が、体験をもとに課題設定するにあたって、自分の内面を見つめ直すのには大きな戸惑いがあると予想された。また、生徒は指示されるのを待っていることが多く、自分で何かを決定することに慣れておらず、自分で決めたことに自信がもてないことも多い。

そこで、webingを取り入れ、自分の興味関心を具体的に探っていく活動を行った。また、決めた課題・研究方法を簡単に発表し、意見を言い合ったり、付箋に書いて貼ったりして教師や友だちから感想や励まし、アドバイスをもらえるようにした。

## 2. STEP2 プチ弟子入りしよう！

①プチ弟子入り準備（14時間）・・・プチ弟子入りへ不安を取り除き、活動への期待を高める。

（ワークシート13、14を使用した省略する）

3日間の体験に向けて、それぞれが一人ずつ担当教師について準備を進めた。それぞれの計画に合わせて準備の段階から、なるべく学校外での活動も自由にできるように心がけた。例えば、自力で達人のもとに出かけることができるように交通機関や時間を調べたり、実際にでかけてみて達人と打ち合わせをして活動の下調べをしたりした（プチ弟子入り先希望一覧は、資料2を参照）。

②プチ弟子入り（24時間）・・・とにかくやり遂げた成就感を味わおう！

去年の反省から、長時間、日常からかけ離れた場所で活動することが困難と思われる生徒については、活動をを1日2時間程度にしたり、体験時間より見学時間を長くするなど

して、とにかく全員がプチ弟子入りをやり遂げることができるように工夫した。プチ弟子入り期間中は、生徒と担当でその日の活動を振り返る日誌を書き、次の日への意欲につながるようにと考えた。また、プチ弟子入り終了後にはお世話になった達人にお礼の手紙を書くことで、自分自身の成長を確認すると同時に達人とのコミュニケーションを大切にすることを意識づけようと考えた。プチ弟子入りの日程は省略する。

### 3. STEP 3 達人を紹介しよう

#### ①自己表現（14時間）・・・自分らしく伝えよう！

自分の課題にそって調べたこと、体験したことを自分なりにまとめ、発表する。保護者や卒業した先輩、前籍校の先生などが集まる学習発表会をめざしてまとめる活動を進めていった。お世話になった達人たちにも発表会への招待状を出した。生徒達はポスター、新聞、絵本、コンピュータのプレゼンテーションソフトなど自分に合った方法を選んだ。自分の発表だけでなく友だちの活動の様子についても感想や意見を述べるができるように聞く時のポイントも事前に示した。聴衆から反応が返ってくることは発表する励みにもなるし、相手から認められたということも実感できる。興味もないのに、無理矢理させられた活動でなく、自分が乗り越えた経験なのでたとえ稚拙なまとめであっても、（むしろ教師の手を借りず、自力で仕上げたまとめの方が）堂々と発表することができた。

### 4. STEP 4 自分を振り返ろう

#### ①生きる力（1時間）・・・自分は何を学んだんだろう？

共通体験に始まり、課題設定、プチ弟子入り、そしてまとめと発表という一連の活動か

ら自分は、何を学んだのか振り返ってみた。自分だけでなく、友だち、担当教師、家族、そして達人の目を通して活動を振り返ることができるようにした。独りよがりな振り返り出なく、一人の生徒の成長を多面的に捉えることができるようにするためである。また、自分が一番努力したことを認めてもらうこと、自分自身では気づかなかった成長を他の人から教えてもらうことは、大きな自信となった。生徒の振り返りのなかで、「共通体験は、楽しかった。」「プチ弟子入りは、苦しいこともあったがやり抜いたのが嬉しかった。」という感想が多かった。その中に「全体的に、一番難しかったのは、自分で決めること。」というのがあった。教科書も、参考書もなく、あるのは自分の意志だけ、それをたよりに進まなくてはならなかった今回の活動の大きな成果の一つである。やらされたのではなく、自分で決めてやり遂げたのである。不安も大きい、そこで実感した自信も大きい。自分で決めて、最後まで自分でやり通すこと、そして自信を取り戻すことは、本校の生徒にとってのまさに生きる力である

## IV. 実践事例

### H女（中3 女子 かん黙症）

#### 【生徒の実態】

几帳面でおとなしい。目立ったり、注目されたりするのが苦手である。非常に頑固である。毎日、近所に住む母方の祖母の送迎で通学しており、外出したり、電話に出たりすることもほとんどない。幼い頃から、母親をのぞき、家族ともほとんど話さない。母親との会話もかなり少ない。やりたくないことは、じっと固まったまま動こうとせず、涙を浮かべていることもあったが、中3になって、自分から苦手なことにも挑戦すると目標を掲げ、少しずつではあるが努力している。興味のある

ることは素速く作業を進めたり、笑顔が見られたりする。欠席もほとんどなく自分のペースを堅く守りながら学習やその他の活動に取り組んでいる。楽器の演奏、美術や家庭科の作品作りが得意である。

### 【昨年度の活動の経過】

昨年総合的な学習も、体験活動を多く取り入れた取り組みであった。Hは、自宅で飼っているミニチュアダックスフントを「華ちゃん」と名付け大変かわいがっている。そして、体験先として動物関係特に犬にかかわる職業を希望した。最終的に盲導犬、警察犬等の訓練施設に出かけることとなった。事前の打ち合わせには、何とか出かけることはできたが、3日間の職場体験活動には欠席した。誰も彼女を知らないという環境の方が普段と違ってのびのびできるのではないか、もしかして、何かしら自分からコミュニケーションをとろうとするのではないかと期待していたが、失敗であった。何か話すのではないかと過剰な期待をするあまり、普段と全く違う活動をするにあたっての彼女の緊張の強さに配慮することができなかった。

体験活動による達成感どころか職場体験に参加できず、落ち込んでしまったり、劣等感を持ったりしないように、体験活動を前向きに捉えることができることを考え、数ヶ月後に、今度は、米子で創作活動を続けている工芸家のアトリエに体験に出かけた。今回は、終始担当者も一緒に活動に加わり、緊張を和らげるように心がけた。他の生徒とは違う時期となったが、明るい表情で活動することができた。

### 【今年度の活動の経過】

以前から、将来の夢としてフライトアテンダントやアナウンサー、美容師など接客業や

話すことを専門にした職業に興味を持っていた。現在の本人とはあまりにもかけ離れた夢ではあるが、いつかきっと現実となると心の中では思っているのかもしれない。普段は理想と現実がそれほどかけ離れていると感じてないが、このような実際に学校の外に出て活動するとなると、とたんにそのギャップの大きさにすくんでしまう。

### 【共通体験における活動の様子】

#### 〔水鳥公園〕

日の照りつける屋外での活動は苦手走であったが、黒のゴム長をはき、水生動物よりの網をもって参加する。野生の生き物は動物より植物が好きみたいである。虫や魚は寄ってくるけど草花は向こうから寄ってくることはないからではないか？とにかく疲れ果てた様子であった。

#### 〔ガラス工芸〕

路線バスを利用して出かけた。ガラス切りにも挑戦した。楽しそうであった。

#### 〔保育園〕

子どもは大嫌いである。特に3歳くらいのじっとしてられない年頃が苦手であった。子どもが近づいてきたらどうしようという感じで固まっていて、全く興味がないらしい。

#### 〔製紙工場〕

時折笑顔を見せながらみんなと一緒に行動した。

### 【弟子入り分野決定まで】

本人は文化・芸術の達人のところへ行きたいという（あっという間に決まった）。中でもマスコミ関係・雑貨屋さん・ケーキ屋さんと3つまで絞り込んだ。弟子入り先にアナウンサーを選んだのはH一人であった。昨年のももあり一人で乗り切ることができるか本人も担当者もかなり不安だった。2年連続で

理想と現実の落差について目の当たりにするのは避けたいと思った。もちろんHに「一人でも乗り込むぞ。」というくらいの気合いが入っておれば支援するが……。どうやらそうでもないらしい。あこがれは確かにあるが、今現実を見せつけて壊してしまうのはもったいない。担当者があれこれ心配しているうちにHは、同級生と一緒にケーキ作りの達人のもとへプチ弟子入りすると決めていた。

### 【夏休みの様子】

一緒にケーキ屋にプチ弟子入りする同級生と、夏休みに米子市内ケーキ屋めぐりをした。実際にどのケーキ屋にプチ弟子入りするか決めるためである。働いている人の数、雰囲気、ケーキの種類、ケーキのデザイン、つくっている工程が客に見えるかどうか、自宅からの交通機関など（なぜか味のチェックがない・・・経費削減か？）を調べた。（ちなみに、夏休みとは言えHが友だちと外出するのは珍しい。）

### 【課題設定まで】

「ケーキのデザインと店のディスプレイ」について達人のもとで学びたいと希望した。（これもすぐに決まった。）どのケーキ屋にプチ弟子入りするかについては、なかなか決まらなかった。作業工程がお客から見えない場所につくられている点と店の落ち着いた雰囲気とが決め手となって「ウィーンの森」にプチ弟子入り先を決めた。

### 【プチ弟子入り準備】

「ウィーン」から発想してできるケーキ、パッケージのデザインを考え試作してみることにした。世界を広げるために、とにかく学校の外へ出かけて準備を進めるよう配慮した。

☆ ウィーンって？・・・校内の職員にウィーンについてのアンケートを実施する。

☆ ウィーンににあうケーキは？・・・初めて一人で路線バスに乗り、市民図書館へ行く。図書カードも自分で作ってもらう。積極的に調べ活動開始する。

☆ ウィーンににあうパッケージって？・・・自転車でかなり遠くの文房具店に出かける。ウィーンにあうケーキのパッケージを作るために、パッケージ用の紙を買いに出かけた。ちょっと緊張した様子。教員のあとをびったりついて自転車を走らせる。

☆ パッケージ試作・・・あっという間に素敵な箱を作り上げたがそれほど興味はないかもしれない。

☆ ケーキ試作・・・図書館で借りた本をよく読んで、すっかり作り方を頭に入れている様子。手際よく作業が進めていた。しかし、なぜかふくらまない。2回目の試作に挑戦。やはり焼くまでは順調だが、ふくらまない。3度目も同じ。試作品としては満足ではなさそうだが、繰り返しトライしたのはかなり気合いが入っている様子である。

☆ 達人のご意見は？・・・試作したケーキを「ウィーンの森」に持参し、食べていただいた。「よくがんばってますね。ケーキが膨らむかどうかは焼き方だけでなく、さまし方にもポイントがあるんだよ。あなたは、焼くのは本当によく頑張ったよ」。しかし、達人の前で不本意な出来映えのケーキを前に緊張して固まってしまう。

その他、プチ弟子入りまでに、達人に聞いてみたい「質問カード」も作った。また、プチ弟子入り1週間前には交通手段、持ち物、服装、時間の打ち合わせをしに現地に出かけた。

### 【プチ弟子入り体験の様子】

ケーキ屋さんの都合やHが3日間やり通せることを考え、午後1時～午後3時の2時間

プチ弟子入りをする事になった。学校に集合した後、現地まで自転車で通う事になっていた。集合時間の20分前にはやって来て、緊張しつつも意欲的なスタートとなった。早めに現地に着いたものの、エプロンと三角巾をつけるだけで約15分かかった。服装を整えたあと、作業場に入るのにかなり勇気が必要だったらしい。やはり、同級生と2人で体験することになってよかったと実感。その後はスムーズに活動した。引率なしで町を友だちと自転車を走らせるということにやや緊張した様子で、連日景色を楽しむ余裕もなく、フルスピードで息を切らして通っていた。一日ごとに着替え、作業、終わりの反省を書く等の活動の切り替えも素速く行えるようになり、おろおろせず、自信をもって動くようになっていった。

#### 【体験後のまとめと発表】

普段、感情を表情にも文章にも表すことができないのに、「普段できないことがいろいろできて楽しかった。たった2時間の立ち仕事でもすごく疲れたのに、達人は、早朝からずっと働いていてすごいと思った。」等の気持ちを表す表現をすることができた。実際の活動や達人への質問についてプレゼンテーションソフトを利用してシンプルに、まとめることができた。シンプルだが、自分が図書館まで行って調べたウィーン菓子の作り方と、プチ弟子入りの感想に最も行数を費やしていた。自分の思いを書いて表現するだけでも、かなりの勇気が必要だと思われたが、それだけでなく、コンピュータを操作してみんなの前にそれを発表することができた。勇気がいると言うよりも自分の頑張ったことをみんなに知らせたかったのかもしれない。それほどHにとって、自信をもって伝えたい3日間の体験だったに違いない。

#### 【Hの変容】

一切言葉を発することがなく、表情もそれほど豊かではないので、気持ちを察するのが非常に困難なことが多い。ただ、行動を起こすまでの時間、行動する速度によって前向きなのか、そうでないのか理解することができる。「やりたくない。」ことは行動を起こすまでの時間が長い。時に行動に移らない場合さえある。つまり、「そこで固まった状態」。絶対にやりたくないときは席に座った間机ごとズリズリ教室の後ろまで下がってしまう。「やってもいいわよ。」という時は何とかすり足で歩き出したりもする。「やりたい!」ことは、(めったにないが)説明が終わるとすぐに次々と活動をこなしていく。そんな日々を送っていたが、2学期から、変化が見られるようになった。1つは成績が急に上がり始めた。1つは、服装やメイクに興味を持ち始めた。1つは、「固まった状態」や「机ズリズリ」がなくなった。もう一つは「歩く速さが速くなった。」(小走りさえ見かけることができる。)

#### 【成果と課題】

そんな日々を送っていたが、2学期から、次のような変化が見られるようになった。

1. 成績が急に上がり始めた。やり遂げた自信から、次の目標に挑もうという意識がはっきりとしてきた。目標を達成する喜びを感じ、日々の生活に弾みがでてきた。(ちなみに志望高校のランクがグングンあがっている。英語の模試はほぼ満点。フライトアテンダントへの夢にホップ、ステップ、ジャンプか?)

2. 服装やメイクに興味を持ち始めた。チプ弟子入りの効用かどうか世界が広がり、いいのか悪いのか、スカート丈がやや短くなり、爪と睫毛はやや長くなってきた。何を話題にコミュニケーションすればいいか分からない

ことが多かったが、とりあえず、興味を持っている方向が見えた。

3. 「固まった状態」や「机ズリズリ」がなくなった。プチ弟子入りの際「指示されたことは責任を持ってする。」という目標を立て、きちんとできたことを今後の生活に生かしていきたい。と感想を書いていただけのことはある。

4. 歩く速度があがった。やりたくなければ、友だちやまわりの人間が困っていても、動かないことがしばしばだったが、人をいつまでも待たせることがなくなった。さらに、相手がこうしたいのだろうと先を読んで行動したり、友だちと頻りに手紙の交換をしたりするようになった。コミュニケーションが比較的スムーズになった。徐々に相手のことを考えることができるようになってきたことの現れか。Hにとってこのプチ弟子入りは大きな転機となった。プチ弟子入り先は第一希望の放送局でなくケーキ屋となった。しかし、アナウンサーやフライトアテンダントへの夢が遠のいたのではなく、きっと自分でその夢を実現できるという手がかりを得ることができたの

ではないかと思う。

## VI. おわりに

その道のプロと呼ばれている方は、「自分」の信念をしっかりと持っておられ、考えも明確で、子どもたちに情熱を持って語られる。そんな達人から、自分の興味・関心のあることについてお話を聞き、教えを受けることは、子どもたちにとって新鮮な体験でもあるし、非常に意義深い体験であると思う。達人には、普段接している教員とはまた違った角度で子どもを見ていただき、誉めたり励ましたり、いろいろな言葉をかけて子どもたちを元気づけてくださった。そんな様子を見て、私たち教員も、はっと気づかされることの多い体験であった。そして、この体験活動によって、学校と地域社会との「コラボレイト」の重要性に改めて気づかされることとなった。「弟子入り」という言葉では子どもにとっても比重が重すぎるのでは、と懸念して「プチ」という名前をつけてはいたが、この「プチ弟子入り」によって我々が得たものは、非常に大きなものであったと確信している。

### 資料2 プチ弟子入り先希望一覧

生徒	分野	ぷち弟子入り先候補	◎印は最終プチ弟子入り先
A	動物の世話→楽器	トムソーヤ牧場	◎平田楽器店
B	工芸	是楽暮舎（地元芸術家集団） カラコロ工房 ティー店	◎トーカイ米子サ
C	工芸	是楽暮舎（地元芸術家集団） カラコロ工房 ティー店	◎トーカイ米子サ
D	園芸	フラワー牧場	◎ハーブロードいどべ
E	動物の世話	大山乗馬センター	◎トムソーヤ牧場
F	動物の世話	アロービーチケンネル	◎トムソーヤ牧場
G	保育	なかよし保育園 車尾幼稚園	◎みどり保育園
H	①アナウンサー ② ケーキづくり	BSS 放送 中海TV	リビドー ◎ウィーンの森
I	ケーキづくり	プチフル バンドラの箱	リビドー ◎ウィーンの森
J	ケーキづくり	つるだや バウンドハウス米子・洋菓子工房	◎プチフル
K	お茶		◎レピシエ
L	ボランティア		◎市米養 学校主事

# 日本育療学会会則

## 一. 名称

本学会は「日本育療学会」と称する。

## 二. 目的

本学会は、家族、教育、医療及び福祉等の関係者の一体的な対応によって、心身の健康に問題をもつ子供の望ましい人間形成を図るための研究を推進し、その成果を普及する。

## 三. 事業

本学会の目的を達成するために次の事業を行う。

### (一) 研究の推進

1. 学術研究及び実践的研究
2. 心身の健康に問題をもつ子供に関する家族、教育、医療及び福祉等の歴史に関する研究

### (二) 研究・研修会の開催

1. 研究会
2. 研修会
3. 海外研修会

### (三) 学会誌等の刊行

1. 学会誌
2. その他必要な資料

### (四) 情報・資料の収集・活用

### (五) 顕彰の実施

### (六) その他、本学会にとって必要な事項

## 四. 組織

### (一) 会員

1. 正会員は、本学会の趣旨に賛同し、年会費を納入した者
2. 賛助会員は、本学会の趣旨に賛同し、賛助会費を納入した個人又は団体

### (二) 役員等

1. 会長 1名
2. 副会長 若干名
3. 理事 若干名
4. 監事 3名

5. 顧問 若干名

6. 役員及び顧問は理事会において決定し、総会に報告する。

7. 役員及び顧問の任期は2年とする。但し再任を妨げない。

### (三) 理事会・委員会

#### 1. 理事会

会長、副会長、理事をもって構成し、本学会の重要事項を決定する。

#### 2. 委員会

- (1) 研究・研修委員会
- (2) 特別研究委員会
- (3) 編集委員会
- (4) 情報・資料委員会
- (5) 顕彰委員会

### (四) 事務局

1. 本学会に、事業を執行するための事務局を置く。

2. 事務局の所在地

〒194 東京都町田市森野1-39-15

## 五. 会計

本学会の会計は年会費、賛助会費、寄付金及びその他の収入をもって当てる。

### (一) 会費

1. 正会員 年会費 3,000円
2. 賛助会員 賛助会費  
一口 10,000円

### (二) 会計年度

毎年4月1日から翌年の3月31日までとする。

## 六. その他

### (一) 事業開始日

本学会の事業は、平成6年5月29日から開始する。

## 編集後記

◆第27号は平成14年12月に発行する予定でした。誠に申し訳ないことですが、3カ月近くも遅れてしまいました。実は予想もしていなかったことですが、会費の集まり具合が悪く、その時点では支払いが出来そうになかったのです。これも不況の影響でしょうか。昨年夏の研修会はお陰で赤字にならずに運営できましたので、このような事態になるとは考えていませんでした。改めて会費の納入をお願い致します。

◆記念講演をいただきました近藤先生には12月発行の予定で、校正をお願いし、お忙しいところご丁寧な朱筆を入れていただきました。また、さらに分かりやすく訂正して下さいました。お礼と共に遅れましたことを深くお詫び申し上げます。

◆同様に、大嶋先生にお礼とお詫びを申し上げます。沢山の資料を使ってのお話しでしたので、なるべく参考資料を載せたいと思いましたが、紙数の関係で割愛させていただく方が多くなってしまいました。残念です。

◆今回は、実践報告や特別寄稿と言える内容の原稿を多く頂きました。感謝します。特に、東海大学看護学科に勤務されている井上さんからは、看護師として関わりを持たれた母親の思いを、深い考察と共に紹介して頂き、心打たれるものがあります。

◆石本先生の稿は、昨年の半ばころに頂いたのですが、掲載の機会があわず延び延びになっていましたが、昨年夏、小児がんを研修テーマにしたこともあって載せさせて頂きました。次号（小児がんの内容を中心に編集する予定）と併せてお読み下さい。

◆門司養護学校からは、不登校児童生徒の成長を意図した支援について、3年間にわたって研究された内容を基に報告していただきました。その成果はもちろん、今後の支援体制や家庭支援の在り方の研究が再び寄せられることを期待したいと思います。

◆不当校生徒への独特な働きかけ、活動の取り組みが生き生きと伝わってくるような米子養護学校の実践報告、ありがとうございました。

### 『育療』編集委員

小林 信秋	佐藤 栄一	佐藤 隆
武田 鉄郎	中川 正次	中塚 博勝
松井 一郎	宮田 功郎	山本 昌邦

平成15年3月18日発行

編集発行者 日本育療学会

代表者 加藤安雄

編集代表者 宮田功郎

発行所 日本育療学会事務局

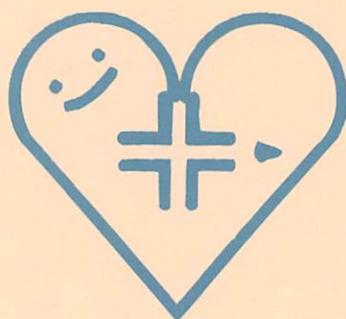
町田市森野 1-39-15

☎ 042-722-2203

印刷所 福川印刷株式会社

東京都町田市忠生 3-6-5

☎ 042-791-2411(代)



シンボルマークの意味

育…教育という意味で鉛筆

療…医療で聴診器と赤十字

あたたかい心でつつむという意味でハート

あかるく微笑む子どもの顔

「岸本ますみさんの作」

教育 医療 家族 福祉関係者でつくる **日本育療学会**